
確かに彼処は異世界だった。

遥祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確かに彼処は異世界だった。

【Nコード】

N8420N

【作者名】

遥祈

【あらすじ】

ある日の神社、二人の中学生が消えた。それは事実、しかし現実にはなかったこと。虚構の現実を過ごした二人の、死力の物語。本当に死力かは怪しい感じ。

Epilogue

多分、あの時あいつに話し掛けたのは偶然、気紛れだ。

名前の読みが一緒だというだけで、随分俺と比べられていたから、あいつは俺を嫌っているのだと思っていた。

それは先入観と 多分同情とか、そんな感情からのものだったと思う。

俺がそんなふうにしてしまうほど、あいつは普通だった。

身長も体型も並み、テストの点数も並み。

でも、何処か不思議な雰囲気を持っていたあいつの顔を、俺は今でも知らない。

きっと、学校の誰も知らないのだろうと思う。

目を覆う長い髪と、かけていた眼鏡の所為で、素顔を見たことがなかったのだ。

あいつは意図して、見せないようにしていたのだろうけど。

今でもあいつの心は解らなくて、どれが本当のあいつだったのかも解らない。

色々なことを忘れていくけど、あいつと、あの世界で起きたことを、

忘れられない　忘れられるわけ、なかった。

鮮明に、色濃く、苦しいまでに、俺の心に刻みついている。

何が正しかったのか、何をすればよかったのか、その時の俺も、今の俺でさえも、解っていない。

あの世界は過ぎた過去だし、考えても仕方がないけれど、ふとした時に考えてしまう。

何か、救える方法はなかったのだろうか。

きつと、絶対、俺のない頭じゃ、どう頑張ったって思いつかないけど、誰かが思いついていたかもしれない。

あの場所にいなかった人なら、思いついたのかもしれない、そう思えてならない。

もう、考えたところで意味はないのだけど。

深く深く、永遠のような眠りについてしまったのだから。

俺がもう一度、あいつに逢うことはないのだろう。

「さよならも、言えなかった」

思わず、眩いていた。

何も言うことができなかつたから。

文句も、お礼も、何もあいつに言えずじまいで、声一つ、かけられなかつた。

俺は一生、あの世界に囚われ続けるのだろつ。

Epilogue a (後書き)

あらすじに死力とありますが、死力を尽くすのは大分後です。多分。

Prologue

夕陽が煌々と街を照らす中で、汗を滴らせながら、俺は自転車をこいでいた。

秋に向けて次第に涼しくなってきたけど、自転車をこげば身体は中から火照ってきて、冷房の効いた部屋で存分に遊んできた身体には、少々暑さがこたえている。

それでも家まで無事にこぎ終わると、倦怠感に足が重く感じられたが、珍しい人物を見かけてそれも消えた。

いつもの俺なら構わず素通りするのだが、そいつが真剣に何かを見ていたから、好奇心から声をかける。

「氷崎？珍しいな……お詣りか？」

片手を上げて声をかけると、氷崎憂木は驚いたように顔を上げた。

髪と眼鏡が邪魔になって、その表情までは解らなかったけど。

「一也……君？どうして神社にいるんですか……」

戸惑った声を出し、もたれかかっていた御神木から身体を離すと、

氷崎は自然な仕草で持っていた紙をポケットにしまった。

その紙の内容が気になったけど、不自然に詮索することでもないから、別にいいかと思う。話しかけたのは紙が気になったからなのに、だ。

「此处、俺の家なんだよ。神社の裏にあるでかい家、あれな」

一也の一族は、代々神社の神主をしていて、それが影響してか家は大きい。

俺自身は神社に興味はないけど、やりたいことも特にはないから、将来は親父を継いで神主になるのだろう。

ちなみに、神社だけでは家族を養うことができたため、並行して剣道を教えていて、俺もついでに教えてもらっている。

「それで？氷崎は何してたわけ？」

「なんでもありませんよ。もう日が暮れますから、帰りますね」

俺の言葉に小さく首を振り、そばを擦り抜けようとしたけど、それはさせない、もう空は暗いのみだから。

進めないと解ると、氷崎は不満げに唇を引き結んで振り返った。

それに苦笑を零して、俺は空を指差し、つられて空を見上げた氷崎に話しかける。

「帰るつても、もう暗いし危ない。お前の家、此処から遠いんだろ？今からだと完全に暗くなる。車出してもらうから、来いよ」

空はすでに藍色に染まっていて、氷崎が今から走って帰ったとしても、家に着くのは空が闇に吞まれてからだ。

少し渋ったが、溜め息を吐いて氷崎は頷いた。

「仕方ありませんね……。まずは一也君、手を放してください」

緩慢な動きで腕を持ち上げられ、もう放していると思っていたから、慌てて手を放した。

「っ……っ！」

いつもより腕が重い、そう感じたとき、音になりえない、息を吸い込むだけの行為を氷崎が行った。それだけで、氷崎の驚きを表すのには十分だった。

重いと感じたのは、俺の手が氷崎の腕を引きずっていたからで、そ

れはありえない現象だった。

俺は手を放したつもりで、放さない気などなかったのに、離れない。困惑しながら腕を引っ張り、指を動かそうとするのに、其処が繋がったように離れず、動きもしないのだ。

引っ張れば腕が痛い、動かそうとすれば指に力がこもる、しかし、離れる気配は全くなかった。

「どう、なってるんだ……っ！」

「そんなの、知らなっ!？」

若干、氷崎の声が上ずった。

紙を入れた制服のポケットから、白銀色の光が漏れ出ていた。

それはまるで心臓が脈打つように、光が弱く強く強弱をつけて輝く。

どくん、と力強い音が聞こえてくるようだった。

熱い、氷崎が無意識にそう呟いた。

実際は光が熱を発することはなく、ただただ輝いているのに、氷崎は確かな熱を感じていたらしい。

「……………」

驚愕と恐怖の入り混じったような表情をして、俺はあらがうように力なく首を降る。

「行ってはいけないのに……………」

光に侵食され、霞みがかかる意識の中、俺はそう呟いていた。

一話 異界とイザナギ

『フルー！ねえ待ってってば！』

『やだね！ヴィーが遅いからだろー？』

何がなんだか、解らなかった。

足をもつれさせながら一生懸命に走る少年と、軽口を叩きながら、少年のついてこれる早さで走る少年が、俺の目の前にいて。

二人は桜色の混じる淡い銀の地面と、それを微かに照らす青白の綿毛の中にいた 幻想的で、神秘的な光景が、意識を取り戻した俺の前に広がっていて、まだ意識を取り戻していないのかと錯覚するほどだった。

「…何処だよ…此処、」

一瞬息を呑んだあとに眉を寄せ、警告するように痛む頭を掻くと、

奇妙な感覚に気付いた。

何か切なくて、懐かしいと、会ったこともない少年達を見て感じるのだ。

フルーとヴィー、それが彼らの愛称なのだろうということは簡単に解った、でも懐かしさを感じる要素が解らない。

ただの既視感なのかとも考えてみたけど、それにしても無理のある光景だった。

「……ヴィー、」

ゆっくりと少年の愛称を呟く。

目を閉じれば目蓋の裏に先程の少年と、何故だか氷崎の顔が浮かぶ。

其処で、一緒にいたはずの氷崎がないことに思い当たった俺は、慌てて辺りを見回した。

綺麗な世界が広がっているだけで、氷崎はいない。

「氷崎、いないのかっ……」

絶望したように呟くと、くしゃりと顔が歪んだ。

何も解らない状態で、知り合いも何もいない場所に放り出されるなどどんで、たまったものではない。

これが日本なら違っていたかもしれないけど、此処はどう鼻眞目に見たとしても日本ではない。

目の前が真っ暗になった気がした。

さっきの子供がまだ近くに居るのか、時々笑い声が耳に入ってくる。

それが腹立たしくて、怒鳴りたくなって、そんなことを思う自分が悔しかった。

「……………何でっ、……………?」

苛立ち頭を掻き毟っていると、いきなり視界が歪んだ。

形の判別が出来ないくらいに歪んだ視界がしばらくのあいだ続いて、その視界に慣れてきた頃、歪んだ視界は映す光景を変えて、また形成されていった。

+++++

無意識に細めていたらしい目を開くと、顔を覗き込んでいたらしい

人物の顔に驚き、勢いよく身体を起こした。

「ひさつぎい……!?!」

「うっ……一也……君、痛いじゃないですか」

がつん、と額と額がぶつかる音がして、反動でよろめいた俺は、寝かされていた布団に肘をついた。

氷崎も額を押さえ、畳に手をついている。

その表情は髪で隠され解らないが、きつと恨めしげな表情をしているのだろう。

今度はゆっくりと身体を起こし、自分のいる場所を見回した。

純日本風の、木で作られた家のように、い草と檜の匂いが鼻腔をくすぐった。

しかし、開け放たれた障子から覗く景色は、どう見ても異界のものだった。

「……ちよっ、と……待て」

誰に言うでもなく呟くと、布団から起き上がり、足早に外へ向かう。

自分の着ている服が浴衣になっていることにも気付かないくらい、俺は衝撃を受けていた。

外は白が基本的な色で、それに合わせるように薄い色の建物が多く、俺が寝ていた平屋のような、色の濃い建物はあまり見受けられず、浮いているようだ。

事情を理解できず、呆然と外を見続ける俺の後ろから、静かな声がかけられた。

「おや……起きたのかい」

「っ……え、」

反射的に振り向き、俺は後ろに立っていた人物の顔に驚いて、文字通り言葉を失った。

男にしては綺麗な顔に、少し垂れた瞳、長い黒髪はよく手入れされているのか、濡れたような艶を持っている。

一見すれば女と見間違えてしまいそうなその人を、それでも男だと解ったのは、身長と喉仏があったからだ。

背が高い部類に入る俺よりも高い身長、しっかりと出た喉仏、これがないければ男とは解らなかつただろう。

「まったく、君はもう少し冷静さを養ったほうがいいですよ」

呆れた声に、男の後ろを見れば、ため息を吐きながら歩み寄る氷崎の姿があった。

着ている服が浴衣で、俺は目を瞬いた　　氷崎はあの時、制服だつたはずだ。

「氷崎？いつ着替えたんだ？」

「貴方はまったく……一也君も着ているでしょう」

不思議そうな顔をしていたのだろう、呆れた声で指摘され、自分の格好にようやく気付いた俺は、小さく声を上げた。

そんな俺に微笑みながら、男が持っていた服を差し出してきた。

「これが君の服だよ。すまないね……寝苦しかろうと思ったんだが、

男が微笑みをすまなさそうな笑みに変えて謝るものだから、悪くないはずなのに、自分が悪いような感覚に陥ってしまう。

慌てて首を振るが、男の笑みを換えられるような言葉が見つからず、否定の言葉は尻すばみになっていく。

「えっと、だから……その、」

しどろもどろに、どんどんと声が小さくなる俺を見兼ねたのか、きつと早く話を進めかつたんだろうけど、氷崎が助け船を出してくれた。

「イザナギさん、一也君は驚いただけで、責めているわけではありませんか。……それと、自分の状況がまず解っていないので、彼に説明をお願いしたいのですが」

「そうなのかい？なら……いいのだけど、」

伺うような視線が向けられ、人形のような硬い動きで頷いたけど、内心でとても混乱していた。

氷崎の言った、イザナギという名前には覚えがあったのだ。

腐っても俺は神主の息子であり、神の名前くらいはある程度解るそれが有名なものになるほど知っている神は多い。

イザナギはイザナミの夫であり、様々な神を子に授かった男神だ。

答えを見付けようのない疑問が頭に渦巻き、俺は食い入るようにイザナギさんを見つめてしまう。

苦笑したイザナギさんが顔の前で手を打ったことで我に返って、俺は恥ずかしさに顔を背けた。

「そうだね……説明もするけれど、今は君の疑問を解決した方がいいみたいだ」

笑みを見せるイザナギさんの後ろで、氷崎がため息を吐いていた。

一話 異界とイザナギ（後書き）

誤字脱字、おかしい箇所がありましたらお知らせください。

二話 疑問と事後承諾

俺がイザナギさんに訊いたことは三つだ。

一つ疑問を解消すると、また新たな疑問が出てきて、話は少し長引いた。

一つは、此処が何処か。

一つは、本当に神なのか。

一つは、何故自分達が此処にいるのか。

俺の疑問は、イザナギさんが説明しなかったこととほとんど同じだったようで、結局説明がされることはなかった。

話をまとめると、此処は神の住む島で、正式な名称はない。

それというのも、島に住む数多の神々が、それぞれの住みやすいように島を改造するからだ。

いらぬ部分を削除し、或いは付け足し、島の形が原型を留めておらず、島というのはある程度形が決まっているもので、此処には他の国も何も無いことから、島に名前はない。

詰まる所、必要ないのだ。

島に住む神々は正真正銘本物の神だが、認識が人間とは違う。

此処の神は、人間が姿を思い描き、それを信じたときに誕生し、死ぬのは信者がいなくなり、存在を知る人間がいなくなったときだ。

口伝や書物がある今、いなくなる神はほとんどいないらしい。

島には世界中の、それこそ名前も解らないような神がいて、好き勝手に過ごしている。

共通言語というものが存在せず、英語も日本語も、何を言っているのかさっぱりな方言も、自動翻訳で正しく伝わっている。方言を使う神がいるのかは微妙なのだが。

そして、本来なら説明の本題だった、“俺と氷崎を喚んだ理由”なのだが、俺はまったく関係なかった。

本来は氷崎だけを喚ぶはずだったが、いざ喚ぶときになり、何故か俺が乱入してしまったらしい。

それでも引くに引けない状態で、二人ともが喚ばれた。

俺が来ると解った時点で、時の神カイロスが時間を留めたので、カイロスさんがそれを止めるまではいつまでいても、地球の時間は進まない。

イザナギさんの言った何故か、という部分に違和感を感じたけど、乱入してしまった手前、訊くことはできなかった。

“氷崎を喚ぶ理由”は、氷崎本人にしか教えられないらしく、その氷崎もまだ教えられていないようだ。

「ありがとうございます、イザナギさん」

「いや、巻き込んでしまったのは私達の責任だからね……。礼など言わないでくれ」

俺の疑問を丁寧に、解りやすく教えてくれたイザナギさんには神の神々しさもあつたが、それ以上に人柄のいい青年といった雰囲気を持っていた。

その雰囲気申し訳なさからなのか、性格からなのか、俺にはよく解らなかつたが、恐らく性格からなのだと思う。

「とりあえず事情は解りましたけど、いつ帰されるんですか？」

「すまない……。それは、氷崎君と同時に、としか言えないんだ」

軽く首を振ったイザナギさんが目を伏せ、同時に頭を下げた。

神様に頭を下げられては、神をまつる神主の息子としては慌てざるをえない。

慌ただしく首を振り、上ずった声で顔を上げてくれと必死に頼む姿はきつと、人が見ていれば確実に可哀相に思ってくれるだろうほどだった。

現神主である父と、前神主である祖父は厳格な性格で、敬い尊ぶべき神に頭を下げさせたとあっては、きついお叱りが待っていて、俺はそのお叱りを体験済みだから、余計必死になってしまうのだ。

カイロスさんが時を留めているのだから、心配する必要はまったくなかったわけなのだが。

「それで……だね。帰る時期になるまで、この島にいてもらうことになるのだけど……いいかい？無理を言えば、帰してもらえるかもしれないよ」

「……いいえ。それでも俺は神主の息子なんです。神様に無理は言えないし、氷崎を置いてもいけません」

これだけは譲れないのだ、と揺るぎなく首を振れば、イザナギさんは安心したように息を吐いた。

俺達のそばにいて話を聞いていた氷崎は驚いたように身動きをして、わざとらしく咳き込んでで注目を集める。

「……説明も済んだようなので、次は島の案内を頼みたいのですが、よろしいですか？」

「……ふふ……勿論ですよ」

俺の言葉に照れたらしい氷崎を微笑ましげに笑い、イザナギさんは
快く承諾した。

二話 疑問と事後承諾（後書き）

クロノスは過去から未来へ、一定速度、一定方向へ流れる時間の神。カイロスは速度が変わったり繰り返し返したり、逆行したり止まったりする時間の神。

クロノス時間とカイロス時間で考えていますので、今回時間を留めているのはカイロスとなりました。

違っているかもしれませんが、ご容赦ください。

三話 屋敷とタナトス

「なんか……変な感じだな」

薄い色の島を歩きながら、そう呟く。

俺達のいた現代社会には様々な色が溢れていたから、薄い色ばかりの島に違和感を感じるのは仕方がない。

それに、島の色は薄いのに、其処に住む神々の色はそれよりも濃いから、余計に違和感を感じるのだ。

「造りから何まで、此処は根本から違いますからね」

「氷崎さあ……なんでそんなに冷静なわけ？もうちよつと興奮しろよ、こつこつところで男子はガキになるってのは鉄則だぜ？」

冷静な氷崎とは違い、小さな子供のように頬を綻ばせていた俺は、呆れてしまうほど意味の解らない鉄則を言っていた。

自分でも意味が解らないが、とりあえず俺の気分は相当上がったいているのだ。

その証拠に足取りはいつもより軽く、今すぐにも走りだしていきたい、というのを我慢して、うずうずしている。

忙しく視線をめぐらせる俺を笑いながら見つめるイザナギさんは、それでもしつかり俺の行く先をコントロールしてくれていた。

そのまま十三分ほどふらふらと歩いていると、来るまでに見ていた家々よりも大きな屋敷の前に来ていた。

それぞれが過ごしやすいよう、小さかったり大きかったりした家々なのだが、この屋敷は広がった。

豪華な装飾などなく、しかし圧倒的な威厳のようなものが滲み出ていた。

「すごい……ですね」

「私達は過ごしやすいさに重点を置いているのだけれど、此処は一応……島の代表が住んでいるから」

イザナギさんの言葉に、氷崎は首を傾げた。

この島は自由過ぎるほどに自由な島だ、人間の島とは根底から違う。人間は自然から搾取し、或いは自らで作り、それを加工して生活しているが、此処でそんな面倒臭いことをする神はいない。必要がないからだ。

娯楽としての食事という概念はあるけど、食事をする必要はなく、

自堕落な生活をしているだけなのだ。

「へえ、代表って誰だろうなあ？氷崎」

「……僕が知るわけないでしょう。黙っていても解りますから、一也君はじっとしててください」

たしなめるような声に言い返そうと唇を開くが、それは息を吐き出すだけに終わった。

ぎい、と重い音を立てて、目の前の扉が開かれたからだ。

姿を現わしたのは、漆黒をも呑み込んでしまうような、闇を纏った青年だった。

肌を覆うように巻かれた黒い包帯から、鋭い輝きを持つ、黒に近い藍色の瞳が覗いている。

ぞっとするほどの眼光に、竦んでしまう。

「……やあ、タナトス。もう少し表情を緩めないかい？人間の少年には強すぎる」

苦笑したイザナギさんの言葉に、きよとんとした表情をするタナトスさんだが、俺達の様子を見てため息を吐いた。

少しだけ緩くなったような気がする表情だが、大した変化はない。

「…………悪かった。俺は人にも、神にも…………慣れていないから」

話すことの不慣れさを表すように、途切れ途切れの言葉。

まだまだ鋭い眼光だが、幾分ましになり、悪い神ではないことが解ると、竦んでいた身体から、すつと力が抜ける。

無意識に硬直させていたらしい氷崎の身体からも力が抜け、細く息を吐いた。

「とりあえず、中に入らせてくれるかい？」

「…………ああ」

ふるりと身を翻したタナトスさんは、俺達を置いて中へと入っていった。

「仕方ないねえ…………タナトスは…………行こうか」

三話 屋敷とタナトス（後書き）

話が中々、進みません……！

のろのろ頑張っていきますので、生温かい目で見せてあげてください。

四話 書庫と既視感

無言で俺達の前を歩くタナトスさんに案内され、着いたのは応接室のような部屋だった。

島の色が薄い、というのは見かけだけだったのか、落ち着いた色合いをした部屋だった。

島の代表というのは、昔、神々の誕生が著しかった頃は忙しい役職だったのだが、今となっては置物職になってしまっている。

タナトスさんは不器用だが、責任感は強いらしく、俺達が島に在る間は面倒を見てくれる。

死を神格化させた神であるタナトスさんは、故に生の大切さを知っていて、生きている俺達を丁寧に持て成してくれるのだ。

タナトスさんが俺達に言ったことは少ない。

島は物凄く広いから、安易に外に出ていけないこと　　迷子になると探るのが大変だからだ。

今、俺達の身体は擬似的な神になっているため、食事は基本的に必要がないこと。

これだけだ、もし不備があれば、その都度追加されるのだろう。

「……当分此処で生活だ……好きに見て回ってくれ」

「ありがとうございます、タナトスさん。それでは遠慮なく」

楽しみに唇を歪ませ、氷崎は一人で部屋を出ていった。

氷崎を追うために、俺は頭を下げてそつと部屋を出ていこうとするが、その前にタナトスさんが呼び止めた。

「……すまない」

苦汁に満ちた声に驚き、振り向いた。

瞳しか見えないが、タナトスさんのその瞳は、何処揺れているような気がした。

不思議そうな顔をしているだろう俺を部屋の外へ追い出して、イザナギさんは視線を落とすタナトスさんに厳しい目を向ける。

「……タナトス、余計な真似はあの子を呼び戻すだけだ。何も解らないほうが……いい」

+++++

「なんだっ たんだろう？まあ、喚んじまったことへの詫びかな？」

そう予測している俺は、迷子になっていた。

意外に足の速かったらしい氷崎に追い付こうとして、闇雲に歩いていたのだが、帰り道も解らなくなり、まだ歩いているのだ。

殺風景な長い廊下は、何処も同じように見えて、沢山の扉も代わり映えがしない。

何処まで続くのだろう、そう考えていた矢先、他よりも大きな扉が、微かに開いていることに気付いた。

「氷崎ー、いるのかあ？」

呼び掛けながら扉を開き、中を伺うが、しんと静まり人がいる様子はない。

でも、持ち前の好奇心をくすぐられないわけなくて、俺は部屋の中へと入っていった。

部屋には無数の本がおさめられていて、中には本当に古いのだろう本も、無造作に本棚に入れられていた。

沢山ありすぎて目が回りそうな中で、俺は一つの本に目を奪われた。赤茶の背表紙には題名がなく、とても古い本だと一目で解る。

あまり本を読まない俺だけど、何故かその内容が気になり、本を手にとった。

予想どおりの程よい重さに、本棚に背中を預けて頁をめくる。

「……………つ、これ……………」

本は分厚いながらに絵本のような書き方で、けれどその内容は極めて現実的だった。この島では、だけど。

それよりも俺が驚いたのは、本の内容に既視感が発生することだ。

子供向けの雰囲気なのに、俺が本当に体験したことがあるように感じてしまう。

本の真ん中まで読み進めたとき、書庫の扉が思い切り開け放たれた。

反射的に持っていた本を本棚に戻し、扉に向き直る。

其処には慥然とした表情のタナトスさんが、腕を組んで仁王立ちしていた。

五話 友愛と敬意

「……タナトスさん」

仁王立ちをしているタナトスさんを見ると、無意識の威圧なのか、何処か圧迫されている気分だ。

「どうやって……入った？」

「氷崎に追い付こうとして、迷子になって……闇雲に歩いていたら、此処につきました」

嘘ではない。

嘘ではないが、タナトスさんが厳しい視線を俺に向けると、緊張で身体が強張った。

「……そうか」

目を伏せ、何か思索する表情。

不思議に思っけれど、無闇に詮索するのはよくない。

少しすると、タナトスさんはちょっと困った表情をして、顔を上げた。

「迷子……か。来い、もう……イザナギは帰るから」

「あ、はい！挨拶、しないと」

タナトスさんが何故困った表情をしたのかは解らないけれど、悪い人ではないから、俺はタナトスさんに何も言わない。

何だかんだで面倒見のいいお兄さんで、不器用で、嫌いにはなれない空気を纏った人だから。

でも、さっきの無然とした表情と、困った表情が気になった。

何故あんな表情をしたのか、あまり詮索はできないけれど、あの表情の奥の感情が気になってしまう。

「（……書庫にいたのが、いけなかった？）」

好きに見て回れと言ったのはタナトスさんだけど、書庫には入れないと思っていたのかもしれない。

タナトスさんはどうやって入ったと訊いた。

書庫には鍵がかかっていて、入れないようにしていたのかもしれない。

なのに俺が簡単に入ってしまったものだから、あんな表情をしたのかもかもしれない。

書庫に入るのがそんなにいけないとは思えないけれど、大切な本があったのかもしれないし、不用意に入った俺が悪い。

結論をつけて、改めて謝ろうと顔を上げた。

「ふっ……」

いつの間にか立ち止まっていたタナトスさんに気付かず、俺は背中にぶつかつた。

鼻の頭を押さえて、謝ろうと顔を上げる。

「大丈夫か……？」

呆れたような、微笑ましいような、そんな表情のタナトスさんが俺を見ていて、恥ずかしくなった俺は小さく頷いて、目を逸らした。

書庫での表情など感じさせない、やわらかな表情だ。

でも、その表情と声色が、小さな子供に言つようなもので、ちよつと反抗心が出てくる。

永遠的な年月を過ごしてきたタナトスさん達神にとって、俺は小さな子供と変わらないのだろう。

しかし、それにしたつて、人間的な年齢で考えてほしかった。

「すみません」

「……いや、いい。それよりも……イザナギが帰つてしまつが」

目で示されて外を見れば、イザナギさんが歩いていた。

此処は二階 階段を上がつた記憶がないのだが で、今からでは走つても間に合わない。

だが此処には窓がある。

勢い良く窓を開け放つと、大声でイザナギさんを呼んだ。

「イザナギさん！ さようならっ……また、会いに行きます！」

窓から身を乗り出して言えば、振り返つたイザナギさんが少し驚いて、すぐに笑みを浮かべる。

小さく頷いたイザナギさんが片手を軽く上げて、また歩きだした。ゆっくりと小さくなっていく後ろ姿を見ながら、じわりと暖かさが広がっていく。

それは、神に対する敬愛であって、イザナギさんという個人に対する友愛であって。

「よかったな」

「……はい」

少し笑って、俺はタナトスさんに向けて礼をした。

道場の師範に、神社の神主に、鍛えられた敬意を示す礼。

これから面倒をかけてしまうことへの詫びと合わせて、しっかりと礼をした。

六話 部屋と星空

「遅かったですね、一也君」

俺達が始めに通された部屋で、氷崎はお茶を飲んでいて。

ソファに背中を預けて、洋菓子を片手に持って、伏し目がちで。

その姿を見て、少し苛ついてしまったのは許してほしい。

氷崎を探して迷子になっていたのに、本人が悠々とお茶を飲んでいたらというのは、中々許しがたいことなのだ。

「氷崎は何処見てきた？」

「僕は執務室に。今は使われていませんけど、年季が入っていて、楽しめましたよ」

とてもそうとは思えない、淡々とした口調。

見えない表情と相まって、氷崎は俺に不思議な印象を与えていた。

俺と氷崎の共通点なんて、名前の読みくらい　俺は優騎、氷崎は憂木だ　で、今日までに話した回数を数えても、両手で足りるく

らい、接点がなかった。

避けていたとかではなく、氷崎は一人を好んでいて、俺は大勢で騒ぐのが好きだったから、接点がなかったのだ。

でも、入学式のように氷崎を見て思ったのは、気が合いそう、だった。

俺の憶測は的外れだったらしく、中学三年を迎えた今でも、氷崎との接点はない。

そういえば、気が合いそうだと思ったのは、氷崎の顔と雰囲気からだったと思うのだが、入学時の氷崎を思い出せないのは何故だろう。

「……………もう、暗い。部屋に案内する……………ついてこい」

タナトスさんの言葉に、氷崎はお茶を流し込み、舌で唇を舐めてから立ち上がった。

応接室の窓から見える景色は薄暗くなっているから、見えにくい。

いつの間にかこんなに時間が経っていたのか、なんて思いながら、俺は身を翻した。

横目で確認したタナトスさんは、何も言わずに部屋を出て、俺達の住む部屋に案内してくれる。

応接室から右に廊下を歩いて、階段を上り、また右に歩いた一番奥

の二部屋、其処が俺達の部屋だ。

氷崎と向かい合わせの部屋割りで、俺はフレイエント、氷崎はヴィーゲントとネームプレートのかかった部屋だ。

ネームプレートはかかっているものの、もう随分部屋は使われていないから、問題はないらしい。

それでも、勝手に人の部屋を使っているみたいで、忍びないのだけど。

「掃除はしてあるから……居心地は……悪くない、と思う」

自信なさげなわりに確信したような声、そのアンバランスさに思わず笑みが零れた。

入ってみる、そう促され、僅かに軋む扉を開けた。

ベッドと、机と、本棚、典型的な部屋の形だ。

既視感を感じたのは、俺の部屋もこんな感じだからだろう。

違っているのは、学生鞆や教科書がないところくらい。ゲームは友達にやらせてもらうし、外で遊ぶほうが好きだから、家にはあまりない。

「おー、本当に掃除してある。しばらく人が住んでないって解んな

いなあ」

ふむふむと頷いて、くるりと振り返った。

廊下にはタナトスさんが立っていて、俺に気付いたらしく顔を向けてくる。

「ありがとうございます、快適に過ごせそうです」

「……そうか。今日はもう寝ろ……氷崎はもう寝たぞ」

ふい、と顔を背け、タナトスさんは素っ気なくそう言った。

氷崎は早いなー、と思いつつ、タナトスさんに会釈をしてから部屋に戻ると、廊下を歩いていくタナトスさんの足音がしばらく聞こえていた。

ふう、と息を吐いて、部屋の窓から空を見上げる。

藍色に染まり切った空は、今からぐんと闇に吞まれていくのだろう。

いつもより大分早い就寝だけど、色々あって疲れているから、ちょっといいかもしれない。

ベッドに背中を預けて目を閉じれば、すぐに眠気が襲ってきて、夢も見ないくらいに深い眠りに沈んでいった。

+++++

「……此処は、懐かしい。何故僕を喚んだのかを知っているから……
…一也君には、帰っていてほしかったな」

少し、笑う。

星が落ちそうな夜だから、弱気になっているのかもしれない。

それでも、と思う。

一也君はまだ、何も知らないから、最後まで知らなければいいと思う。

姿形は違っていても、本質的なものは何も変わっていないくて、嬉しかったけど、だからこそ怖かった。

きつと、また傷付けるから。

「だから……しめんなさい」

七話 彼等と話

翌日から、俺達はちよこちよこ外に出ていくこととなった。

部屋にいても暇なだけで、やることもないから、広い島を散策する方が有意義なのだ。

島は本当に広くて、島というより大陸並みの広さらしい。

それだけ人間が信じる神は様々あり、だからこそ聖戦なんてものが罷り通ってしまうのだ。

「君は商人か？それとも旅人か？」

擦れた声が耳に届いた。

汚れたローブを纏い、旅人のような風貌をした男が、すれ違いざまに囁いたのだ。

「なんだろ……、なんか、すっごい気になるっ……！」

商人だとなにがあるのか、旅人だとなにがあるのか、気になりはじめると止まらない。

振り返って、俺はその神様を追い掛けはじめた。

+ + + + +

「……そう。やっぱり、僕の所為で、帰ってきちゃったんだね」

表情の変わらないタナトスを見上げて、僕は呟いた。

僕はソファに腰掛けて、壁に寄りかかって立っているタナトスと話していた。

表情は変わらないけど、タナトスは雰囲気が変わるから、今、申し訳ないと思っていることも、簡単に解る。

それでも、僕は苛立ちを隠せない。

僕の所為で記憶を封じられて、魂を傷付けられて、それなのにまた、僕は一也優騎としての魂まで傷付けようとしている。

大好きだったのに、それと同じくらい憎んだ。

僕は永遠的な苦痛を味わっていくのに、鍵の役目をしていればいいあの人を、どうしようもないくらい憎く感じた。

解っていた、それがただの癖みだって。

僕が貧乏くじを引いたから、楽な役回りのあの人を僻んだ。

生まれたときから決まっていた役回りは、替えることなんて出来ないから。

僕が鍵になれば、そのチカラを押さえられず、容易に解き放つていただろうし、あの人が器になれば、その苦痛を背負うことが出来ず、容易に壊れてしまっていただろう。

この島が平和であることの代償として僕達が生まれたのに、僕が役目を全うしなかったから。

ツケが、あの人を傷付けた。

「……俺は、何も言えないけど……あいつは好きで……お前を護りたくて、やったんだ。……気に病むのは、」

「解ってるっつっ!」

荒げた声に、自分でも驚いた。

泣いたような、苦しいような擦れた声で、想像以上に大きくて、言ったあとには耳鳴りがしたから。

気遣うような声が煩わしくて、惨めになってしまいそうで、僕は応接室を出ていった。

「ヴィーゲント……」

タナトスは、静かになった部屋で、そう呟いていた。

+++++

旅人な神様を追って、俺は森に来ていた。

太く勇ましい木々が立ち並び、その根は地表にまで迫り出してきている。

地面の下では、根と根が絡み合っていること間違いなしだ。

俺を誘い出すような動きの神様は、俺が追い付けない、でも撒けな
い程度の速度で走っていて、今、その神様と向かい合っている。

「君は商人か？それとも旅人か？」

「商人じゃないし、旅もしてないよ」

不思議と敬語の取れてしまう神様に、俺は酷く冷静な声で言った。

神様はローブから覗く、口元の笑みを深くして、また言葉を投げ掛ける。

「おかしいな？君は旅をしているじゃないか。ディアルターレから異界へ……そしてまたディアルターレへ」

「ディアルターレ……？」

俺が訊き返せば、神様は呆れたように肩を竦めた。

「忘れたのかい？この島の名前だよ、君達が付けたんじゃないか」

「ちよつ……イザナギさんはこの島に名前はないって！それに、俺は島に名前を付けた覚えはないよ！」

不可解なことが多すぎた。

神様が嘘を吐いているようには見えないし、でも俺はそんなことを知らない。

それに、島から異界、そしてまた島へって、どういうことなのか。

俺は眉をひそめて神様を見た、眉をひそめたのは神様も一緒に、訝しげに俺を見ている。

「イザナギが……？あれ？君、どうしたの。姿が違うじゃないか」

「違うって、何が！」

「うんー、間違ったか？でも魂は同じなんだよ」

ぶつぶつと呟きながら、旅人な神様は森の奥へと入っていく。

これ以上追うとさすがに戻れなくなるから追うに追えず、俺は齒痒いながらも来た方へ戻っていった。

その時、森の奥で神は ヤカテクトリは声を上げた。

「あ。忘れてた、フレイエントは封じられたんじゃないか」

八話 問題とイザナミ

翌日、俺はあてもなく島を歩いていた。

旅人の格好をした神様の、あの言葉の意味が解らず、見つけたら訊き出そうとしているのだ。

でも、この広い島だから、見つけるのは絶望的だ。

解っているのに探してしまうのは、人の性なのだろうか。

「……やっぱ、ダメだよなあ」

誰かが創った噴水の縁に腰掛け、ため息とともに呟いた。

何しろ、至るところに神様がいる中、たった一人の神様を探し出すのは至難の業だ。

そんなことが出来ると高を括っていたわけでもないのだが、やはりため息は吐いてしまう。

空を翔べたのなら、上空から似た格好の神様を探し、地上に降りてから確認することが出来るのだが、人間は翼を持たない種族、無い物ねだりをして仕方がない。

「あー……誰か手伝ってくれたらいいのに……」

「何をだい？」

「うん？神様を探すんだよー……………つつっ！？」

ぱつと勢い良く振り向いた。

普通に返していたけど、今俺に話し掛ける人などいない だって
氷崎は部屋に引きこもっているし、タナトスさんも然りだから。

「イザナギさん……………」

「それで？誰を探すんだい？」

目を見開く俺を気にせず、イザナギさんは首を傾げた。

それに苦笑を零し、昨日会った神様のことを話すと、イザナギさん
は表情を硬くした。

一瞬のことで、気にはならなかったけど、あの神様と何かあったの
かもしれない。

「会ったのは難しいね。彼…………ヤカテクトリと言うんだけどね、島の

あちこちを放浪しているから」

「そうですか……」

「気を落さないで、また会えるよ」

落胆した俺を気に掛け、イザナギさんが笑う。

ちょっと困ったような、何かを隠しているような、曖昧な笑みだ。

そう感じているのに何も訊けないのは、人間を見守っている神様だから、人間に害なすことはないと思っっているからなのだろう。

神様は神様でも、島にいる神様は、俺達が信じる神様ではないのに。

「そう……ですね。焦っても仕方がないですよ、気長に待ちます」

そうなのだ、島にいる時間は、地球に影響されない。

どれだけ待っても時間は経たず、俺の感覚が麻痺するだけなのだから、この問題を除けば、一向に構わない。

「そうだね。……そうだ、良かったら、私の家に来ないかい？イザナミに君のことを話したら、会ってみたいと言ってね」

ゆるりと微笑んだイザナギさんは嬉しそうで、イザナミさんの言葉が嬉しかったらしい。

「ええ。喜んで」

+++++

「タナトス、ごめんね」

「謝るくらいなら……」

言葉の途中で止めたタナトスは、苦々しく僕を睨んだ。

睨んでから、掌を強く握り締める。

優しい彼のことだから、世界が自分達のために、創られた僕達の感情を無視して創ったから、そう感じているのだろう。

それは紛れもない事実だし、変えようのない真実だ。

それでも、辛く思ってくれることを嬉しく感じる。

「ありがとう、タナトス。それじゃあ、今後の話をしようか」

「問題は……お前がどうやって死ぬのかだ」

もう、僕は壊れている。

こんな話、笑って出来るなんて。

+++++

「いらっしゃい、一也さん」

ふわりと笑ったイザナミさんは、綺麗だった。

大和撫子とでも言えばいいのだろうか、長く艶やかな黒髪を垂らし、凜とした雰囲気を持つ人だ。

イザナギさんと笑い合う姿は、こっちが恥ずかしくなるほどで、其処だけ違う空気感だった。

「あ、そうだ。お茶を持ってきますね」

居間に通され、俺達が座ったところで、イザナミさんが思い出したように手を叩いた。

マイペースにお茶を入れに行くイザナミさんに苦笑して、イザナギさんは頬を掻く。

「すまないね。イザナミは少々抜けているんだ」

「大丈夫ですよ。イザナギさんはそんなところも好きなんですよね？」

何だか野次馬根性を刺激され、嬉々としてからかってしまう。

そんな俺に一瞬驚いて、イザナギさんは照れ隠しに笑い、小さく頷いた。

幸せそうなのその表情に羨ましくなるが、自国の神様が幸せなのはいいことだ。

「幸せそうで、よかったです」

日本の神話では、あまり幸せにはなれていなかったから。

イザナギが黄泉比良坂を大岩で塞ぎ、離縁してしまったから。

火の神を産んだが故の悲恋、悲痛、だから、幸せそうにしているのが嬉しいのだ。

イザナギが悲しそうにしていたのを、彼は知らない。

九話 計画と感情

一也君は一時間ほど話してから帰っていった。

地球での生活だとか、笑い話だとか、タナトスにはよくしてもらっているだとか、取り留めのない話を、私が質問する形で。

そうでもしないと、一也君はあまり話さないだろうから。

イザナミは私の横で、何も言わなかったけれど、楽しそうに話を聞いていた。

でも、一也君がヤカテクトリに会っていたのは誤算だった。

あいつは、地図を描くにしても広すぎて描けないこの島を、ずっと放浪していて、私も、彼の存在が頭から消えてしまっくらいには、会っていなかったのに。

何故今此処に来てしまうのか。

彼等の魂に惹かれてしまったのだろうか、なんて間が悪い。

一也君が私達を疑えば、計画はご破算になるかもしれないのに。

「……でも、核心には到らないだろうし……大丈夫、だよな？」

「イザナギ……辛い？」

私の呟きを聞いて、イザナミは言った。

「辛いのなら、やめてもいいのよ？あの子達を帰して、二度と此処へ喚べないように、器と鍵の資格を消滅させて……私達は闇に囚われるけれど、貴方と一緒にならそれも構わない。自分達のためにあの子達の人生を壊すのが……嫌なのでしょう？」

「……ああ、そうだね。でも、一度私は奪ったんだよ、ヴィーとフルーの魂に傷を付け、感情を無視して役目を負わせた。今更楽になることは……出来ないんだよ」

始まったままにしておくことは出来ない。

始めたのなら、誰かが終わりを告げなければならぬ。

別離が終わりならば、誰かが引き離さなくてはならない。

そしてその役目は、私と、タナトスと、ミスラが負った。

私が引き金を引く。

タナトスが鍵の鎖と記憶を殺す。

ミスラが眠りを契約する。

鍵として存在出来なくなったフルーは地球に還されるし、永遠的な眠りについたヴィーの存在は抹消される。

其処に不確定要素はいらない。

「イザナミ、終わったら……散歩に行こうか」

十話 氷崎と死

世界が闇に包まれる寸前、一也君が部屋を訪ねてきた。

「一也君が僕の部屋に来るのは初めてのことで、驚いたけど、一也君は気付かなかった。」

少し眉を寄せ、瞳が細まっている。

何かを考え込んでいて、それはきっと、計画にも関係することなのだろう、そう直感した。

「……………どうぞ、入ってください。話を、聞きますから」

「ごめん……………ありがとう、氷崎」

「一也君らしくなく、苦笑のような、引きつった笑みを浮かべている。」

「何があったのだろう。」

「彼にはもう傷付いてほしくないのに、この世界はとことん僕達に辛く当たる。」

「すでに傷付いたのだから、一也君にまで責を負わせたくない。」

十分過ぎるほど傷付いて、なのにまた僕が原因で傷付くなど、絶対、許せない。

だから僕は限りなく一也君の情を叩き落とす。

まだ、魂の欠片くらいは残っているのだろう、一面影を残したその顔が歪むのを、見なくてすむように。

「……俺、喚ばれたのに意味がないなんて思えないんだ。決まってるみたいに……キーワードが示されてく。氷崎はどうして喚ばれた？俺の読んだ絵本はなんだ。どうしてタナトスさんはあんなに怒った？ディアルターレってなんだ？俺達が付けたってなんだ？魂は一緒？……おかしいよ、氷崎……隠し事、してるだろ」

睨み付けるように、一也君は僕を見つめる。

思ったことを吐き出して、それによって浮き彫りになっていく、計画が一也君に露呈する。

「何のこと……ですか？絵本って、ディアルターレって、何」

僕は一也君に白を切る。

ぐっと拳を作ったことに気付きながら、それを無視し、鼻で笑う夢でも見ていたのではないですか、と。

突き放す、突き放す、突き放す。

これで、嫌われただろうか。

僕の中の冷静な部分が、そう考える。

傷付いたような瞳をして、一也君は踵を返し、少し僕を睨んだ。

「嫌われた、ね」

自嘲するように呟き、ふと一也君の言葉に引つ掛かりを覚える。

俺の読んだ絵本、一也君はそう言ったけど、正しい道筋で歩かなければ、書庫には辿り着けない。

なれば一也君は正しい道筋を歩いたということ。

一也君の中にある記憶は封じられているから、彼は底に眠る感覚だけで歩き、当てたのだ。

此処に来た時点で薄々気付いていたけど、一也君の封印が解けかけている。

「急がなきゃ……ね」

+++++

「タナトス、計画を早めよう。月蝕まで待てない。……次に月が赤く染まった時、実行しよう」

僕の言葉に、タナトスは何故だと目を向けてくる。

手持ちぶさたにくるくるとスプーンを回し、窓際に立つタナトスと、目の前に座るミスラに、一也君が言ったことを伝えた。

僕のこと、絵本、タナトスが怒ったわけ、ディアルターレの名付け親、魂が同じ、そう端的に伝えると、二人は顔かざるを得ない。

「……仕方ないねえ。ま、悪いのはアタシらだ。いいよ、契約に時期なんて関係ないから」

「ああ、解った」

「ありがとう、一也君……フルーには言わないでね？僕が、死ぬなんて」

悪いのは僕達なんだ。

だから、ケリを付けるのも僕達だ。

ごめんね、フレーエント。

また一人にさせるけど、過去とは完全に剥離させるから、大丈夫だよ。

何もかもを、忘れさせるから。

+++++

「……………」

ずるりと滑り込みそうになって、慌てて踏み止まった。

俺が氷崎に訊いたとき、あいつはさほど驚いていなかった。

だから何かを知っていると思い、俺があややって訊いたなら、氷崎はきっと仲間に伝えるに行く。俺は部屋に帰ったと思うだろうから、足音など消さず、普通に。

思ったとおりに氷崎は動いたけど、こんなことなら聞かないほうがよかった。

氷崎が、死んで、俺が、フルー。

「……頭が、痛い」

十一話 彼等と心

どうやって部屋に戻ったのか、覚えていない。

聞いたことが衝撃的で、頭蓋骨に響くような頭痛は酷くて、何かを警告しているようで。

いつ寝たのかも解らないけど、いつのまにか、朝日が昇っていた。

「……俺が、フルー」

名前の愛称だろうけど、既視感があって、懐かしくなるのは、俺がフルーだからなんだろうか。

でも俺はフルーなんて聞いたことがないんだ、誰だよ、フルーって。

フルー、フルー、何処かで聞いたことのある響き。

「そうだ……フレージェント、部屋の、主だった子」

俺がフルーだから、この部屋に既視感を感じた。

本当なら、この前に会った神様 ヤカテクトリと言ったか が
言っていたことにも納得がいく。

フルーは最初から島にいて、何かが起こって地球へ行った、そしてまた、戻ってきた。

そうなら既視感を感じることも解るけれど、何故俺の記憶がないのか、それに俺はずっと地球で暮らしていて、氷崎も多分、そうなの
に。

何故みんなはそれを隠したのか、知られたくないことでも、あるの
だろうか。

なんて、考えても、それは現実逃避でしかないのだけど。

現実を受け入れきれない俺の、精一杯の現実逃避。

「……どうしてだ。死ぬのに、氷崎は平気なんだよ……」

解らない、氷崎が、解らないよ。

+++++

月が近い夜だ。

吸い込まれてしまいそうな、魅せられてしまつ月の煌めき。

深夜だから、静かすぎるほどの静寂に、耳が痛くなる。

それは錯覚だけど、今の気持ちは本当なんだ。

「……君にもう会えなくなるなんて……寂しいな。……寂しいだけなんて、薄情かな」

扉の向こう、一也君の眠る部屋を見透かすように、目を細める。

あれが起きて、僕の感情は少しずつ剥離していつてるから、いつかは何も、思わなくなるのだろう。

感情がなくなってしまうえば、僕は僕でなくなつて、今もこの身の内にあるチカラが、世界を荒涼とさせる。

だから僕は、死ななければいけない。

死とは比喻で、永遠的な眠りにつく。

何年か、何世紀か、それは誰にも解らなくて、ひよつとしたら、世界はがらりと変わっているかもしれない。

それはそれで、吹っ切れるからいいんだ。

中途半端に変わるのには、酷く辛くて、苦しくて、生殺しにされるよ
うだから。

十二話 夢と死場所

それは、罪深き感情を身の内に押さえ込み、ディアルターレに平和をもたらす。

それは、罪深き感情に鍵を付け、ディアルターレに流れ込まないようにする。

いつかも解らないほど昔から、その存在はあった。

人と同じ時を過ごすそれは、何代も何代も代替を繰り返し、記憶をその魂に留めながら、ディアルターレを守ってきた。

姿形は違えど、名は同じ。

姿形は違えど、魂は同じ。

それは二体一对の、ディアルターレを守るためだけに創りだされた、架空の存在。

いつしかそれは現実となり感情を持つようになった。

そして、

壊れた。

+++++

「……っ！」

がばりと起き上がった。

真っ暗な中、声だけが聞こえてきて、言っていることの意味は解らないはずなのに、理解できてしまって、何かを思い出しかけた。

思い出さなければいけないけれど、思い出せば、誰かが苦しむ気がする。

「……変なの。夢……なのに」

掌で額を押さえ、首を振った。

掌の暖かさだけが現実を教えてくれて、独りぼっちになったような感覚。

「俺は……どうすればいい」

問いに答えてくれる者はいない。

静寂に包まれている部屋は、色をなくしたように其処にあって、今の俺は部屋の主とは認められていないような気がした。

この部屋は、この島は、俺を必要としてはいない。

必要としているのは、俺の中にある魂で、俺じゃなくフレイエントだ。

それが淋しくて、でも当然だからと納得している自分もいる。

「フレイエントとヴィーゲントは……どんな関係だったんだろ」

氷崎の様子から見れば、仲は良かったみたいだけど、俺と氷崎は無関係だった。

氷崎は、フレイエントじゃなくなった、魂だけ持った俺なんて嫌いなのもしれない。

でも俺は、

「知りたいんだ」

氷崎が何故死ななければならぬのか、俺は何なのか、何故俺にフレイエントの記憶がないのかを、知りたい。

そのためには、綻びを探さなければいけない。

隠し事をしているわけだから、何処かで不自然なことがあるはずなのだ。

「……タナトスさん、だ」

+++++

朝も早い、何処か湿気った空気の中、タナトスに頼んで、僕が死ぬ予定の建物に連れてきてもらっていた。

やはり、自分が死ぬ場所くらいは知っておきたいのだ。

でも、一也君のことが気がかりだった。

いつもの習慣で、今日の僕達よりも早くに起きる一也君なのに、今日は微かに眉根を寄せて眠っていたから。

起きられないほどの深い眠りに落ちているのか、起きることなど許さないほどの悪夢に苛まれているのか。

どちらにしても、或いはどちらでもなくとも、気がかりだ。

「……ヴィー、どうかしたか？」

訝しげに訊くタナトスには曖昧な笑みを見せ、先を促した。

微かに首を傾げながら、それでも歩きだしてくれたタナトスは良い奴だと思う。

今回のことは僕の我儘だったのに、了承してくれて、それが負い目からだとしても、嬉しい。

多分、今回の計画でまた負い目が増えるだろうけど、それを僕は謝れない。謝っちゃいけない。

でも、ごめんね。

薄ら青い壁に金で細かな細工がされている、美しい教会だった。

此処で、僕は死ぬのだ。

「グイー…………お前は、結晶となって…………眠る」

「……………うん」

目を伏せるタナトス。

ごめんね、ごめんね、ごめんなさい、僕はたった一人の為に、沢山の力を借りて、沢山傷つける。

それをディアルターレの為だと言って、自分を許そうとして、僕はいやな奴だ。

君にも言いたかったよ、ごめんねフルー。

十三話 絵本と内容

迷ったときと同じように、夢中で廊下を歩いた。

しばらく歩いていると、他よりも明らかに大きな扉が目につく。

書庫だ。

ぎい、と重い音を立てて扉を開けると、紙の匂いが微かに漂ってくるような気がした。

窓から射し込む光が床や本棚を照らしている。

いくつもある本棚の中から、適当に突っ込んでしまった絵本を探すため、棚を順に目で追っていく。

入り口から三つ目の本棚、きつちりと詰められた本の上に横たわる形で、それはあった。

題名もない、古びた本。

ゆっくりと手に取り、紙を捲った。

+++++

そこにははじめ、何もありませんでした。

かといって、本当に何もなかったわけではなく、土があり、空がありました。

宇宙はありません。

そこはずっと、そのままの姿で、昼と夜を繰り返してきました。

どれくらいの間が経ったのかもわからなくなったところ、忽然と何かが現れました。

少し経って、滲んだ絵具のような姿の何かが、人の形になりました。

何かは、はじめからそこにあつたように馴染んで、ぽん、と手を叩きました。

するとそれまでは何もなかった土に、白い石畳が敷かれ、草木が咲き、そこが世界になり、世界は色づきました。

やがて世界にぽつぽつと姿が増えはじめました。

そこは信仰される神々のため、世界が設定した島、島では何一つ不自由はありません。

でも、戦女神や破壊神は、島を壊してしまいます。

世界はそれを防ぐために、二つの存在を創ったのです。

一つは、負の感情を一身に受けるヴィーゲント。

一つは、その鍵を役目に負うフレイエント。

人と同じ造りの二つは、数えきれないほどに死して、そのたびに作り替えられました。

姿形が違っただけで、創られてからの記憶も全て持っていたし、役目を負うことに文句はありませんでした。

彼等が創られてから、千三百年が経ったころ、二つは二人と神々に認識され、島の名前を付ける役目を負いました。

少し考えてから、二人は言います。

「島の名前は、ディアルターレ」

その名前に意味はありませんが、二人にとって、島が特別になりました。

そこからまた何年も経って、二人は死に、また二人は創られました。

でもそれは欠陥品、よく言えば自分に対して愛を持つようになりませんでした。

ヴィーゲントは苦しんでいましたが、鈍感なフレイエントは気付きません。

やがて愛が憎しみに変わって、ヴィーゲントは壊れて、様々な感情がディアルターレに氾濫しました。

フリーエントはヴィーゲントを呼び続けますが、意識がなくなったヴィーゲントは反応しません。

泣きながら、フリーエントは叫びました。

「ごめん……！ヴィーのこと解らなくて……っ、幸せになってほしいっ……！」

直後、フリーエントのまわりが渦巻きました。

それがフリーエントの掌に収束して、一つの古びた鍵を残していきましました。

神々は驚きを隠せません。

それは、ヴィーゲントの中の感情を制御するものではなく、ヴィーゲントを自由にするものでした。

ヴィーゲントも同じように、フリーエントを自由にする鍵を持っています。長い時間の中で、それが使われたことはありません。

これがはじめてだったのです。

「……ごめんな、俺の所為だよ」

鍵を手にとって、座り込むヴィーゲントによっていくと、その胸に鍵を突き立てました。

もとは澄んでいた、今は歪んでしまった瞳がフレイエントを映します。

がちゃん

ディアルターレに音が響いて、鍵がかかりました。

溢れだしていた感情は石となり、ヴィーゲントはディアルターレ

世界の源、地球へと送られました。

感情を制御するヴィーゲントがいなくなり、本来ならフレイエントが役目を継続しなければなりません。

しかし、フレイエントはヴィーゲントを逃がしたのです。

感情の波を押さえつけ、役目を継続させなければなりませんでした。

逃がしてしまったフレイエントは、罰を受け入れるしかありません。

記憶を封印され、地球でヴィーゲントと隣り合う道筋をいき、いつか来る再会でフレイエントに罰がいくのです。

罰の程度は偶然によって決まり、何かによって左右されることはありません。

そう、世界は決まっています。

十四話 焦りと平和

はっと、タナトスが顔を上げた。

「一也が、書庫に入った」

「え……？」

信じられなかった。

一也君には、書庫に入るなどタナトスから言ってもらっていた。

それは、一也君が目上の人の言ったことを守る人間だったからだ。

タナトスは神の域だし、よほどのことがないかぎり、一也君が書庫に入るなどないはずだったのに。

「とりあえず屋敷に帰ろう。一也君のことはそれからだ」

「……ああ」

二人とも焦っていたけど、焦りは禁物だと知っていたから、なんと

か冷静でいられた。

焦ったままでは、思わぬことで失敗して、着いたときには一也君がすべて知ったあとだった、なんてこともありえてしまうから。

協会から屋敷まで、全力で走ったとしても十七分はかかる。

タナトスだけならもっと速く行けるのだけど、僕と一緒にでは速さをセーブしなければいけないから。

人間と同じ造りになっていることを疎ましく思った。

「タナトス、先に行つて。僕はあとから行く」

言えば、少し僕の瞳を見つめたあと、タナトスは頷いた。

服の裾を翻したタナトスは、右足にぐつと力を入れて走りだした。

黒の残像さえ見えてしまいそんな速さに驚くとともに呆れてしまう。

「……一也君、頼むから、じっとしてよ」

無理な願いを口にして、僕も走りだした。

+++++

絵本には、色々なことを省略しながら、ヴィーゲントとフレイエントのことが書いてあった。

思っていたより、氷崎を説得するのが難しそうだ。

絵本を見るかぎりでは、完全にヴィーゲントが悪いのだし、何よりフレイエントである俺が何を言っても意味がない気がする。

元あった場所に絵本を戻し、置いてあった椅子に座った。

ぎし、と椅子が軋んだから、大分古いものなのだろう。

座りながら、本棚に整然と並べられた分厚い本を目で追った。

赤茶や群青、漆黒に純白、くすんだ黄色や桜色など、様々な色の背表紙が俺を楽しませてくれる。

数分後、それにも飽きた俺が部屋へ戻ろうとして立ち上がるのと、タナトスさんが書庫の扉を開けるのは、ほぼ同時だった。

+++++

陽の照らす白い街を見ながら、ミスラは考えていた。

一度、ミスラは優騎を陰で見ていることがあるのだが、確かにフレ
ーエントの面影を残していたにも関わらず、違和感を覚えたのだ。

結局その違和感が何なのかが解らないまま、今日にいたったわけだ
が、まだ考える時間はある。

焦らずに考えよう、そう思い、息を吐いた。

穏やかに過ぎていくディアルターレの午前を緩やかに過ごしながら、
ミスラはまた、計画について考えをめぐらせる。

ミスラの役目は眠りの契約。

手違いでヴィーゲントが目を覚ますことのないように、世界が安定
するときまで眠り続けることを契約するのだ。

安定とは、神々全員の心が穏やかになることだが、何しろ数が多い。

いつ眠りが覚めるのかは、ミスラにも解らなかった。

「平和……なのかねえ」

そう呟くミスラの家の横を、黒い風が通り過ぎていった。

十五話 神と虚勢

「……どうして、此処に入った」

鋭い眼光を一身に受けて、思わず身が竦んだ。

タナトスさんの背中から溢れてくる威圧感が、死の影が、俺を包むように存在しているように思えて仕方なかった。

それでも今負けてしまったら、知っていることが知らないこととして処理されて、俺は氷崎を見殺しにすることになってしまうから、タナトスさんを睨み返した。

「不審なことが多すぎたんです。氷崎も言っていたでしょう？……俺は、嫌ですよ。氷崎は殺させない。邪魔してやりますから」

鋭くも穏やかで、優しげないいつもの瞳とはまったく違う、名工達が魂を注いで造り上げた刀のような鋭さに、冷えきった瞳。

これが本来の、伝承に出てくるような『タナトス』の姿なのだろう。

その姿に気圧されまいと虚勢を張って、俺は不敵に笑ってみせた。

俺の心などタナトスさんにはお見通しなのだろうけれど、それでも張らずにはいられない。なんて、滑稽なのだろう。

タナトスさんは眉を寄せ、瞳を細めて俺を睨み付ける。

当然だった。

俺は知らないはずの情報を知っていたのだから、疑うのは道理なのだが、タナトスさん達も重要すぎるほど重要なことを俺に隠していた。

たとえそれが俺のためであったとしても、納得はできない。

理解はできても、だ。

「……何処まで、知っている？」

低い、重圧を伴う声。

怖いな、そう思う。

タナトスさんは死そのものを擬人化した神だから、この世の生きとし生けるものは本能的に恐怖してしまうのだろう。

怖くて仕方がなくて、やはり人が神に逆らうなど無理なことなのかと痛感する。

「氷崎は死ぬ。実行役は貴方とミスラだ、他にもいるのかもしれないけどね。俺はフレイエントで氷崎はヴィーゲント。記憶なんて

ない。でも俺は知ってる、解る。だから既視感を感じたんだ」

正確には何も解っていないくて、ただ漠然とした感情で、そうなのだろうと感じているだけだ。

「……………そうか」

哀しげに瞳が揺らぎ、タナトスさんが俺を見据えた。

静かに呟いた声が緩やかに俺の鼓膜を震わせて、身震いしてしまうほどの恐怖がすとんと剥がれ落ちていった。

タナトスさんが何を思って呟いたのかは解らないけれど、多分俺は予想以上に彼を傷付けているのだろうと思う。

揺らぎは水面を彩る波紋のようにはおさまらず、悲痛に伏せられた瞳にある感情を知ることができない。

それでも、知られなくなかったことを俺が知ってしまったのは明白で。

知られたくないから隠すのだから、俺が感情を察することが出来れば良かったのだが、生憎と俺は鈍いし、色々な感情で混乱していただろう俺は気付くことなんてできやしない。

でもだからこそ、隠されたことを知れたのだ。

必然のように偶然で、嫌になる。

仕組みられたように情報が俺の前に並んでいくから、黒幕がいるのかと疑ってしまうけど、実際には本当に、偶然なのだろう。

「……ねえ、俺は此処まで知ってる。話してくれないなんてこと、ないよね？」

計画を。

真実を。

事実を。

過去を。

色々なことを俺はまだ知らないから、話してほしい。

知らなければいけないことを俺はまだ知らなくて、知りたくて、知らなければいけないで。

知らないほうが幸せな気もするけれど、知っている幸せもあって、知らない不幸もあるのだから、結局それは人それぞれなわけで、俺は知っている幸せを選びたい。

だから聞こう。

貴方が何を思っただけで計画を実行しようとしているのか、納得しているのか、想いを知りたいのだ。

俺が何を思っ
て今此処に
いるのか、
何をしたい
のか、どん
な未来が
いいのか、
想いを知っ
てほしいの
だ。

すべてを理
解しなくて
いい、所詮
は俺の願望
で、エゴな
のだから。

タナトスさん、
貴方は何を
思ってる？

十六話 話と悲しさ

タナトスさんを見つめ続けていると、根負けしたようにため息を吐いた。

それからゆっくりと苦笑して、タナトスさんは初めて、こんなにもはつきりとした表情を『優騎』という人物に見せた。

なんだか感動して、思わず表情が明るくなる。

そんな俺を見て、タナトスさんはまた笑った。

「話すのはいいが……氷崎が来てからで、いいか？」

聞かれ、頷く。

俺としては真実が知ればそれでいいから、断る必要などないのだ。

でも、貴方の想いだって、知りたいんだ。

どうでもいいのだけど、タナトスさんはどうしてまだ氷崎と呼んでいるのだろうか。

俺は知っているのだから、ヴィーゲントと呼んでも何ら問題ないと思うのだが。

+++++

何処かそわそわした雰囲気で、フレイエント　一也はヴィーゲントを待っている。

別に、ヴィーゲントが来る前に話してしまっても良かったのだが、やはりこんなにも重要なことは、本人から聞いたほうがいいだろうと思ひ、一也を待たせている。

しばらくすると、どたどたと騒々しい足音を立てて、ヴィーゲントが応接室へ入ってきた。

「タナトス！一也君がいつ……るね」

あからさまに焦った声を上げたヴィーゲントは、ソファに座る一也を見ると、その勢いを急速に落とした。

目を瞬き、次いで焦っていたことを恥じるように目を逸らす。

「すまん。お前から……話してもらおうと思って、な」

「ああ……うん。解った」

少しため息を吐き、ヴィーゲントは向かいのソファに座った。

さて、と呟いて

「何から話せばいいの？」

ふにやりと笑った。

勿論、髪で隠れているから、口元しか表情はないのだが。

ずっとヴィーゲントの笑顔を見てきた俺やイザナギや、二人と近い関係にある神々なんかは、瞳が見えずとも表情や感情は手に取るように解る。

ヴィーゲントは今、悲しんでいる。

決して知られたくはなかった、自殺擬いの計画を、一也にだけは知られたくなかったのだらう。

しかし、一也は意図せずとも、中に眠るフレイエントがこの島に飛び込ませた。

故に、一也は知ることとなった。

軟禁でもして、外に出さなければ良かったと、ヴィーゲントは思っているのだらう。

「はじめから、話せよ」

口調の荒くなった一也が、ヴィーゲントを睨むように見る。

「……うん。解ったよ」

俯き、ヴィーゲントは僅かに首を振った。

+++++

「まず、単刀直入に言おうか。僕はヴィーゲント、君の中にある魂の名はフレイエント」

「俺じゃなくて、中にある魂？」

訝しげに眉を寄せ、一也は首を傾けた。

「ああ。本来なら君がフレイエントだけど、まだ眠っているからね」

悲しげに微笑み、一也を見透かすような視線を送る。

今は一也優騎のままですらられても、いずれはフレイエントの魂に意識や身体を上書きされて、一也優騎という人間はいなくなってしまう。

記憶はあっても、それは前世のものと処理されてしまう。

一也のことも好きだから、ヴィーゲントは悲しんでいるのだ。

悲しい顔のヴィーゲントと、眉を寄せる一也と、傍観を決め込む俺とで、話は進んでいく。

十七話 彼等と行動

「一也君、計画は知っているんだね？」

確認するように聞かれ、一也は頷く。

今の問いは、一也が知った情報を確認のために話し、それが終わった合図だ。

普段は入れないようにしている書庫に、ヴィーゲントは島に来たその日に入り、一也の読んだ絵本を見ていた。

だから一也に教える情報も限定できたのだ。

そして、今の問いにはもう一つ、意味があった。

いきなりヴィーゲントが黙り込んだから、一也は不思議そうにヴィーゲントを見ている。

そのすきに俺は消える。

タナトスという人型ではなく、『死』という存在に変わったのだ。

俺の身体と服は黒い霧となって霧散して、一也の背後に忍び寄る。

黒い霧は一也の口元と鼻を覆い隠し、本人に気取られないまま、その息を止めさせた。

そこまで来れば当然気付かれるのだが、人と神では比べるまでもなく 一也は沈黙した。

力をなくし、だらりとソファに横たわる一也を見、ヴィーゲントに視線をやれば、心なしか怒った雰囲気。

何故だ、やれと言ったのはお前だろうに。

「タナトスさあ……もつと優しくできないの？」

「文句を、言わないでくれ、これでも加減はした」

不満そうなヴィーゲントに、人型になって言えば、ふうん、と少し睨まれた。

だから何故だ。

ヴィーゲントはカップを置いて、向かいにいる一也に近寄った。

その頬をすりと撫で、目を細める。

「……………ごめんね、一也君」

悲しげに呟いたヴィーゲントは目を閉じて、微かに目蓋を震わせた。

きつと、涙を流すことを我慢しているのだろう。

優しすぎるヴィーゲントは、何もかもを背負い込み、自制し、眠りにつくのだ。

もしかしたら一生目覚めることのない眠りに駆り立ててしまったのは、俺達神と、ヴィーゲントの優しい心根と、一也なのだろうと思う。

できるなら力付くでもヴィーゲントを止めたいが、そんなことはできなかつた。

静かに、涙も流さずに泣いているヴィーゲント。

もうすぐ、俺達は謝ることさえできなくなってしまう。

それでも絶対に、成功しなければならぬのだと、切に思った。

+++++

「……タナトス、ミスラとイザナギを呼んで、一也君も連れて協会に来て。僕は先に行くから。途中で合流しよう」

ヴィーゲントは俯いたままそれだけ言うと、足早に応接室を出てい

った。

仕方がない、と一也を背負って、ミスラ達を呼ぶために市街地へ向かう。

市街地といっても、ミスラの家は少し離れた場所に建っている。

ミスラ曰く、喧騒が微かに聞こえていても、程よく静かな場所がいとのこと。

イザナギの家はもっと市街地に近いから、イザナギから呼びに行った。

イザナギは家で寛いでいたが、事情を話せば先に行くと言って走りだしてしまった。

頭上から光が降り注ぐ中、一也を起こさない程度の速度で走った。

一也の意識は刈り取ったものの、気絶しているだけだから、ある程度の衝撃を与えれば起きてしまう。

今の段階で一也を起こしてしまうのは得策ではない。

こんこんっ

乱暴に扉を叩いていると、呆れたような表情でミスラは扉を開けた。
俺と、俺が背負った一也を見比べ、訝しげに眉を寄せた。

「ミスラ……来てくれ。予定は早められた」

それだけで、ミスラへの説明は済んだ。

軽く頷き、ミスラは俺を急かすように走りだし、行くよ、と怒鳴るように言った。

俺も走りだすと、ミスラの横に並んだ。

一也を起こしてはいけないのだと理解していて、速度を抑えてくれている。

俺達は何も話さず、少しだけ乱れた息と、風が横を過ぎていく音しか聞こえてこなかった。

「あつ……ヴィーゲント！イザナギ！」

道を走るヴィーゲントとイザナギを見つけて、走る速度を緩めた。

こちらに気づいたヴィーゲントは振り返り、にこりと笑った。

ヴィーゲントの笑みを見て、イザナギは気づかれない程度に眉根を寄せた。

それは少し引きつった笑みだったが、あと少しでそんな笑みなど消してしまえる。

ミスラヤイザナギと前々から決めていたのだ。

ヴィーゲントから、フレーエントと一也優騎の記憶を消す。

十八話 ヴィーとフルー

ヴィーとタナトスとミスラと、一也君とともに、私は協会へと来ていた。

清浄な雰囲気ですべてを圧倒させるように創られているらしく、思わず目を奪われた。

私はそう思ったけれど、ヴィーはそう感じてはいないだろう。

「……ヴィー、どうするんだい？見たくないのなら……先にやるのもいいけれど」

一也君から自分の記憶が消えてしまうのは辛いだろうからとそう言え、ヴィーは首を振った。

「大丈夫だよ、僕は見ていなきゃならないからね」

口元だけで笑って、タナトスに向き直ったヴィーは、お願い、とタナトスの暗い瞳を見据えた。

少し目を細めて、タナトスは頷いた。

勢いよく黒い霧となったタナトスは、協会内に霧散した。

これからタナトスは記憶を殺すのだが、そのためには眠っている『フリーエント』の記憶を浮かせなければならなくて、その役目を負うのが私だ。

引き金を引く。

「可哀想なフリーエント、孤独なヴィーゲント」

キン と、高すぎて耳に残る音を立てて、眠りが解けた。

一也君が目を開けて、真っ正面にはヴィーがいる。

目を見開いたまま、一也君の瞳から涙が零れ、服にしみを作り出す。

「ひさ ヴィーゲント……」

途中で、声色が変わった。

驚いたような一也君の声から、喜びの滲むフリーエントの声に。

秀囲気もがらりと変わって、悲しくなってくる　　こんなにも、すぐに消されていなくなってしまうなんて。

澁刺な一也君の笑顔が好きだったけれど、記憶を消したら、すぐに地球へ送るつもりだから、もう見れないのだろうか。

名前を呼ばれているのに、ヴィーは何も言わずにいる。

不思議そうな顔をして、フルーは立ち上がった。

少し咳き込み、身体に残っていたらしいタナトスを吐き出すと、ふわりと微笑んだ。

「ヴィー、ヴィーゲント！俺だよ、フレーエントだよ！解らないのか……？」

眉をひそめたフルーの 正確には一也君の 身体に、フレーエントの身体がかぶさるように溶けていく。

一也君の面影を残しつつも、それはフルーの顔になっていて、一也君は今、自分のものだった身体の中で頑張っているんだろう。

外に出ようと内側を叩いて、ひよっとしたらどうすればいいのかも解らずにいるかもしれない。

「……フレーエント、ごめんね」

鍵の鎖と記憶を殺す。

ヴィーの言葉に目を見開き、半開きになったフルーの口元から、霧

状となったタナトスが忍び込んでいく。

そうして脳に到達したタナトスが、一也君の記憶の一部分を殺すのだ。

びくりと震えたフルーは、僅かに目を伏せる私達を見て、顔を歪ませた。

「何をするつもり！？ヴィーゲント！俺を嫌いになったのか！？」

頭を抑えながらフルーは怒鳴ってヴィーに詰め寄ろうとして、崩れ落ちた。

脳への強制的な刺激に一時的に身体が言うことを利かなくなったのだろう、膝をついても尚、フルーは私達を　ヴィーを見ている。

『どうして』と言うように、困惑に満ちた瞳を見て、ヴィーは悲しげな瞳をフルーに向けた。

髪の間から見たのだろう瞳に、フルーは首を振った。

「どうして……ヴィーゲント、俺は……また一緒に……」

涙が滲んでいた。

信じられなくて、信じたくないのだと言うようだった。

「ダメだよ、フレイエント。一也君の身体を盗っちゃダメだ」

「……ヴィーゲント……俺……俺は……っ、ぐ……あ」

何かを言おうとして、フルーは苦しげに呻く。

タナトスが鎖と記憶を消していつているのだ。

「ごめんね……ごめん」

こっん、と額を合わせたヴィーが、強く目を閉じて何事かを呟いた。

額の合わせ目が淡く光り、それはヴィーに吸い込まれていく。

鎖としての役目を吸い込んでいるのだ。

「……もつすぐ私の番かねえ」

ため息を吐きながら、ミスラが呟いた。

+++++

「はあっ……う、く……」

力が抜けたようにうつ伏せにフルーが倒れて、沈黙する。

僅かに開いた口元からタナトスが空中へ出てきて、人の形をとった。

「鎖の残りは、殺し……記憶も、殺した」

無感情にそう告げたタナトスに、ヴィーも微かに頷いて、ミスラに向き直った。

眠りを契約する。

「契約を願ひ出る者、其はヴィーゲント。契約を受け入れる者、其はミスラ。契約内容は、眠り。契約期間は、一也優騎とヴィーゲントの魂の傷が癒えるまで。尚、輪廻転成により一也優騎が生まれ変わっても、傷が癒えなければ眠りは解けない。……この内容で、契約をするか？」

じっとヴィーの瞳を見据えて、ミスラは問う。

「契約するよ」

「……契約成立だ。これより、契約は施行される」

ミスラが言い終わると、ヴィーは一瞬で眠りについた。

その身体は床に打ち付けられることなく、溶けることのない氷で覆われ、それが溶けるのは契約期間が終わったときだけ。

契約も完了した今、残すのは一也君の帰還だけだ。

「もう少しで、終わるね」

十九話 魂と傷と

一也優騎の魂には傷がついている。

それはヴィーゲントも同じだけれど、一也優騎の場合は深刻だ。

ヴィーゲントと氷崎憂木は同じ魂、器からその存在ができているけど、フレイエントと一也優騎は異なる魂、器で、一也優騎の器の中に魂が二つある状態でその存在はできていた。

それらは長く共に在ったために、フレイエントと一也優騎の魂は一部が溶け合っていた。

それだけならまだ良かったのだが、その溶け合った部分が問題だ。

フレイエントの魂にあった傷の部分が溶け合い、本来フレイエントだけの傷だったのが、一也優騎の魂にも傷ができてしまった。

魂の傷は、現世で器が犯した罪だ。

小さな罪 血を吸ってくる蚊を叩いて殺してしまった なんてものは傷にはならない。

もっと重大な罪 自分と同種のものを、悪意を持って殺したなんてものでないと傷にはならないのだ。

過失ならば傷にはならず、殺したという事実が魂に記録される。

悪意があつたならば、魂に記録され、傷ができる。

罪が大きく、その回数が多いほどに傷は大きくなっていき、最終的には器が傷付く。

現世の身体に傷が現れるのではなく、転生したときに傷の有無、魂に記録された人生によって、後の道筋が決まるのだ。

器が傷付くというのは、後の道筋が悪に落ちるということ。

時に人は「そういう星の下に生まれてきた」と言うが、前の人生で罪を犯したからこそその現世だ。

自業自得というわけだ。

ただ、善行を重ねていれば現世も、後の道筋も良くなるのかと問われれば、それは否だ。

善と悪の均衡というものが魂にはあって、それを保たなければならぬ。

善に偏りすぎても、悪に偏りすぎてもいけない。

善の道筋に偏ってきたなら悪に落とし、悪に偏ってきたなら善を落とす。

この場合の善と悪は、人の性格などで言うものではなく、幸福に包まれる道筋が善、泥や血に塗れた道筋が悪だ。

話がそれってしまったが、言うなれば一也優騎は、謂われのない罪で

悪に落とされてしまうのだ。

こんなにも不幸なことはないだろう。

いや、不幸で済む問題ではない。

本来進むべき道筋から外してしまったのだから、責任を取らなければならぬ。

だが、責任と云ったって、何をすれば本来の道筋へ戻すことが出来るのか、アタシらは知らないから、どうすることもできない。

いくら神といっても、アタシらは所詮世界が、人間が創り出した創造の産物なのだから。

全知全能なわけじゃない、そう言われてるゼウスでさえも、奥さんにはかなわない。

アタシは契約以外に能がないし、タナトスは殺し、イザナギにいたつちやイザナミとの間に神を成したただけなのだ。

「そんなアタシらにゃあ……荷が重い」

はあ、とため息を吐いて、髪を掻き繕る。

目の前に横たわるのは一也優騎で、フレイエントに似ている。

そんなに瓜二つってわけじゃないけど、雰囲気とか仕草が似ている

んだ。

今からアタシらは、この人間の子の記憶を、許可なしに消す。

そのあとに、ヴィーゲントの記憶も、やっぱり許可なしに消す。

アタシらはこの子らのことを思っただけで、子らにとっては
いらぬ世話だろう。

でも、せすにはいらぬ。

せめてわだかまりのない、真っ白な状態で帰ってほしいから。

一也優騎をこのまま帰したら、ここでのことが心に残り続けて、何
か影響が出てくるかもしれない。

ヴィーゲントをこのままにしておいたら、淋しい思いを永遠にする
ことになってしまう。

すべて、アタシらのエゴ。

アタシらは結局、自分達のために、自分達が罪悪感を覚えないうた
めにも、納得するまで考えて、記憶を消してしまうのだ。

「傷は世界に交渉するから……タナトス、やっっておくれ」

「終わりにするんだ」

イザナギが言った。

仕舞いにするために、関係を断ち切るために、消しておくれ、タナトス。

ざら　と崩れるようにタナトスが霧となった。

それが一也優騎を取り巻き、体内に忍び込んでいく。

「……………っ、は……………うあっ、あ……………はあっ、あっ……………!?!」

一也優騎が目を見開き、頭を振り動かす。

「やめっ……………!消す、なあっ……………!」

叫び、いやだいやだと繰り返す。

何をされているのかをわかっているらしく、消すなと言って、タナトスを追い出そうとするように身体を動かしている。

そんなものでタナトスが出ていくわけもなく、じわじわと一也優騎の記憶は消されていく。

「あああああっ……………!タ……………トス!い、やだああああ……………!消すな……………」

…消すなよおっつ！」

そつ一也優騎が叫んだ瞬間に、青白い光りに包まれた。

目が眩むほどの光りに思わず顔を腕で覆うと、目が慣れてきた頃には、目を見開いたタナトスがいて、一也優騎はいない。

「なつ……あり得ない！」

思わず叫んでしまった。

人は霊的能力 所謂超能力などを使えないはずだというのに、一也優騎はアタシらの目の前から消えてみせた。

それも、一也優騎よりも高位にある、タナトスを体内から追いやつて。

そんなことを、ただの人間が出来るわけがない。

より高位の神が能力を貸し与えるくらいしなければ、こんなこと出来やしないし、一也優騎は気に入られることがまずもってない。

一つの器に二つも魂が入った人間など、気に入る対称になどなりはしないのだ。

「タナトス……大丈夫かい？イザナギ、何がどうなつたか解るかい

？」

「大丈夫、だ……」

まだ驚いているのか、タナトスは呆然と座り込んでいる。

イザナギは何か考えているが、まったく考えがまとまらないらしく、顔が険しい。

まず考えなければならぬ事柄は、一也優騎の現在位置だ。

「……二人とも、世界と交渉して、一也優騎の魂の足跡を追うよ」

二十話 ヴィーと優騎

世界と交渉するのに、何か特別なものがある、なんてことはない。

世界としては、この島で事件や何かが起こらないでいてほしいために、私達は世界と比較的楽に話すことが出来る。

「世界よ、一也優騎は今どこにいますか？」

その場で教会をないものとして空を見上げれば、世界はすぐに答えてくれた。

《……一也優騎、フレイエントの中に置いていた少年は……、……
ああ……ヴィーゲントの、中だ》

戸惑うように声を上げて、世界は居場所を教えてくれた。

一也君はヴィーの中にいる。

幸運にも、不幸だった。

+++++

タナトスさんに向かって子供のように　しかも呼び捨てで叫んでいると、まばゆい光に包まれていた。

俺自身その光が眩しくて堅く目をつぶっている間に、見知らぬ場所に飛んだらしい。

辺りは淡く青に染まっていて、世界の境界線が解らないくらいだ。

ここは世界と呼ぶべきところなのだろうか。

土も空もないのに俺は立っていて、息が吸えて、今ここにいられる。

でも、ここはどこなのだろう。

急に不安感に襲われた。

思えば、俺はついさっき、記憶を消されそうになっていたのだ。

あの時俺は不快感というのか、喪失感というのか、とにかくそんなものを感じていた。

体内に異物が入るだけでも不快だったというのに、記憶を消されるというのはどんなに不快なのだろう。

俺は実際に消されたわけではないから、解らないけど。

「誰か！いないのかー!？」

力のかぎり叫んでみたのだが、僅かに声が反響してきただけで、返事はない。

でも、これだって立派な収穫だ。

声が反響するってことは、声が跳ね返る場所があるってことだから。そうと解れば歩き続けるほかなかった。

のだが、さすがに二十分も景色が変わらないと歩くのが億劫になってくる。俺は歩いたりするのに楽しみを必要とする人間なんだ。

辺りは相も変わらず青く染まっていて、なんだか悲しくなってくる。そんな気持ちでとぼとぼ歩いていると、泣いているような声が聞こえてきた。

はっと顔を上げて耳を澄ませると、確かに嗚咽混じりの声が聞こえてきている。

「(でもなんか……知ってる声だぞ……?)」

疑問に思いつつも歩みを進めれば、嗚咽は大きくなっていった。声もはつきりしてきた。

その声は氷崎に似ていて、他人の空似なのか、そう思った。

その人は黒い髪が背中までのびていて、そのくせ金色の綺麗な瞳がきらきら光っている。

座り込んで泣いていたその人は、唇を歪めて俺を見つめる。

「ふっ……え、つく……あっ、ごめ……ふえ……う」

ぼろぼろと大粒の涙を零すその人を、俺は泣き止ませることが出来ない。

何に対して泣いているのかも解らないのだから、当たり前といえば当たり前なのだけど。

とりあえずその人が落ち着くのを待って、俺は話を聞いた。

その人は大切な人を失ったのだという。

正確には、記憶が綺麗さっぱりなくなってしまった。

思い出す確率は限りないほどになくて、それでもいいからと想っていたはずなのに、悲しくて悲しくて、泣いてしまったのだという。

話している間にもその人は何度か泣いて、どれだけその大切な人を思っていたのかがわかった。

その人にも話したけれど、記憶喪失には優先順位みたいなものがある。

大切な人の記憶がまっさきになくなるのだという。

大切な人は、いつも心の底で強く思っている分、いつもは眠っている記憶より、先に飛んでしまうのだ。

「……ねえ、大丈夫。記憶は戻らなくても、新しい思い出でその人の心を埋めていけばいい。取り戻すんじゃない、始まりを、はじめるんだ」

ね？と笑いかけてみたけど、その人の顔は晴れなかった。

この人はどれだけ傷付いているのか、俺には想像も出来ない。

辛くて、苦しくて、いつまでも泣いていてしまいそうくらいで、息苦しくて、そんな気持ちを俺は、感じたことがないから。

俺にはこの人を、慰められない。

二十一話 優しさの辛さ

悲しいと思った。

眠りの中でも、何故か魂は眠らず起きていて、そこから外を見ていた。

もちろん一也君の記憶が消されていくところも見た。

叫んでいたけど無駄、一也君がタナトスにかなうことはない。

そう思っていたのに、どうしてか一也君は僕の魂に入り込んできた。

魂を通して、一也君の記憶が流れ込んできて、一也君は僕の
イーゲントに関する記憶を消されていることに気付いた。

タナトスは消されたという記憶も消してしまうから、一也君は気付いていないけれど。

少しだけ足音を立てて、一也君が僕の目の前に立った。

泣きじゃくる僕に戸惑い、どうしたらいいのかわからないみたいだ。

迷ったような雰囲気のもと、一也君は僕が落ち着くのを待った。

僕は泣きながら、少しだけ驚いていた。

感情が薄くなっているから、こんなにも悲しくなるなんて、想像し

ていなかったから。

あまつさえ、泣いてしまうなんて。

「ふっ……え、つく……あっ、ごめ……ふえ……う」

嗚咽も、涙もとまらなくて、こんな弱い姿を一也君には見られたくないと思っっているのに、とめられない。

予想外に、僕は悲しいみたいだ。

+++++

一也君は僕が落ち着いたのを見て、静かにどうしたのかと聞いた。

あくまで優しく、穏やかに、強制はしない声色に、少しずつ話してしまっ。

曰く、大切な人を失ったのだと。

記憶がすっかりなくなってしまうって、きつと思いついて出してくれることではなくて、それでも良かったはずなのに、悲しくてたまらない。

話している途中にも、一也君の顔を見ていたら何度か泣いてしまっ

た。

そんな僕を気遣うように、一也君は言う。

「……知ってる？記憶喪失には優先順位みたいなものがあるんだ。大切な人の記憶がまっさきになくなるんだって。大切な人は、いつも心の底で強く思っている分、いつもは眠っている記憶より、先に飛んじゃうんだ」

少し笑って、一也君は僕に手を差し伸べる。

なんでもないような顔をして、僕を慰めようとして、優しい一也君は座り込む僕にその手をのばすんだ。

僕にはそれが辛い。

悪いのは僕なのに、いつもそう　とぼっちりを受けるのは一也君ノフレーエントだ。

いつそ嫌ってくれればいいのと思う。

でもこの“いいのに”も、きっとあとで後悔する、僕は我儘だ。

「……ねえ、大丈夫。記憶は戻らなくても、新しい思い出でその人の心を埋めていけばいい。取り戻すんじゃない、始まりを、はじめるんだ」

ね？と一也君は僕に笑いかける。

その邪気のない笑顔が、何よりも僕の悲しみを誘っているなんて、想像もしていないのだろう。

僕がいつまでも返事をしないから、一也君は眉を下げた。

僕の気持ちを解ろうとして、解らなくて、だから困って、どうしようもなくなった顔をしている。

ごめんね、一也君。

僕は君に慰めてもらえるような存在じゃ、ないよ。

+++++

「……ああ……僕は最低だ。望んで……望んで一也君の記憶を消させたのに……張本人が、泣くなんて……」

ぎり、と奥歯を噛み締める。

僕は後悔してばかりだ。

暴走して、後悔して。

消させて、後悔して。

どれもが自業自得な上に、誰かしらに迷惑をかけている。

みんなが僕を怒らないのは、人間と同じ造りをした人間なのに、人間として扱ったことが少なかつたから。

僕らは母の母胎から産み落とされたわけじゃないから、人間じゃないのかもしれないのに、罪悪感を覚えてくれるのは、嬉しい。

でも僕は強欲だから、みんなの気遣いだけじゃ満たされなかつた。

僕はフレイエントの愛情が、みんなの愛情が、無垢な愛情が欲しい。

そうすればきつと満たされるんだ。

そんな戯言を考えて、嗤った。

何が“満たされる”だ。

満たされるわけがない。

本当に、役目なんて放り出して、自由にならなきゃ、自由になつて、このことなんて忘れて、無邪気に笑えなきゃ、僕は満たされない。

でもそれは出来ない。

出来ないから。

だから。

「一也君……ごめんね」

服のポケットに入っていた札を、一也君に押しつけた。

いきなりのことに対応できない一也君を無視して、僕は笑う。

「僕の中から、出て行って。もう……ここに来ないで」

直後に、一也君は光に包まれた。

二十二話 優騎と希望的観測

「え……？」

間抜けな声を出した。

さっきまで真っ白な世界で、少年か少女か、中性的な顔立ちの人と話していたのに、今俺は地球にいる。

イザナギさんも、タナトスさんもいない、地球 俺のいるべき世界に。

ゆるりと首を傾げた。

茜の空に闇が迫ってきていて、空の端が藍色に滲んでいる。

イザナギさんが一緒にしか還せないと言っていたにも関わらず、俺の横に氷崎はいない。

どういふことなのだろう。

『一也君……ごめんね』

『僕の中から、出ていって。もう……ここに来ないで』

そう、あの人は言った。

俺は名前を覚えていないはずなのに名前を言って、あの人は俺に札を押し付け、そして俺はここにいる。

「……………札だ」

きつと、多分、あの札が鍵だったんだ。

札が俺と氷崎を島につれて行って、そしてまた、札が俺を地球へと還した。

勿論、札だけではどうにもならない。

札を発動させる者がなければ、札はただの札だ。

だからといって諦めるわけにいかない、発動させる者が無いのなら、俺自身が発動させればいいだけの話なのだから。

押し付けられた札を探して地面を見回し、ポケットを探った。

くしゃくしゃになった札が出てきて安堵する。

「良かった……………ちゃんと、あった」

薄汚れた札は俺の掌にちゃんとある。

あの島とのつながりが切れたわけじゃない。

まだ切れていないのなら、俺は島に行けるし、まだこの世界に還って来ちゃいけないんだ。

だから俺は。

「君に頼むんだ。……フレイエント」

ふるりと震える。

寒さからでも、恐怖からでもない、フレイエントの魂が答えるために震えたような気がした。

本来フレイエントはもういないはずなのだが、俺の魂に避難してきた核はまだ生きているのだ。

一時的にでも身体を奪われた気持ち悪さや恐怖ははまだ拭えないが、フレイエントはただあの子に会いたかったのだ。

会って、もう一度だけでも言いたかったのだ。

フレイエントはわかっていたから、あの子が自分に負い目を感じていて、だから自分を自由に　記憶を消して自分の中に取り込もうとしていることを、わかっていたから。

ごめんねとありがとうを、言いたかったのだ。

「お前は言いたいんだろっ………だったら協力しろ　っっ！」

半ば叫ぶように言った。

回りに人がいないからそんなことができたけど、はっきり言えば恥ずかしいから、多分今の顔は少し赤くなっているだろう。

これで人がいたら、俺はもう引きこもってしまうかもしれない。

そんな考えを頭から消去し、札を睨み付ける。

みみずが這ったような文字が書かれているばかりで、俺には全く読めない。

でもきつと、フレーエントは読めるはずなんだ。

何千年もあの島にいたなら、札に書かれていたような文字を読む機会だってあったはずだ。

そんな、希望的観測。

それでもこれしか手立てはなくて、父さんや爺さんなら読めるかもしれないけど、二人やみんなを巻き込むつもりなんて毛頭なかったから、結局は希望に縋るしかないんだ。

《……いいよ。手伝ってあげる。でもその代わりに、ヴィーにお別れ

を言わせてね》

頭蓋に直接響くフレーエントの声。

「じゃ、お願い。今少しだけ、俺の身体を……使え、よ」

ぐらりと視界が揺れて、意識が闇に彩られた。

ふと、思う。

「あの子って、誰だ……っけ？」

二十三話 札と対価

「どづいう、ことだい？……一也優騎の気配がなくなった。それに、身体もなくなってしまったよ」

困惑に満ちたミスラの声は、逆に俺を冷静にさせた。

きっと、ヴィーが一也に札を与え、世界へ還したのだろう。一也本人がそれを望んだのかは、別として。

あの札はヴィーを島に呼ぶためのもので、数多の神々の心を憑かせてある。

ヴィーゲントが安全に、四肢や瞳などの欠落なく島に来るようにと願ってあるのだ。

普通の人間として暮らしていたヴィーゲントの身体は地球に馴染みすぎていて、島に呼び寄せるのには多大な危険が伴ったから。

呼び寄せたとき、一也はヴィーと身体を触れ合っていた。

だから札は二人を一人と見なし、加護を一也にもかけていた。

だから一也は欠落しなかった。

だが、一也がもう一度、単独で島に来ようというのなら、それには犠牲が、渡るための代償が必要になるだろう。

瞳か、指か、脳か、耳か、肝臓か、何を取られるかはわからないが、必ずどれかが欠落する。

欠落などしてほしくないから、来ないでくれと願ってしまっ。

神が願うというのも可笑しな話なのだが、神は世界に願う。

人が神に願うように、神も願うのだ。

「一也……来ないでくれ」

「……タナトス、しかし……一也君は、あの子は……」

戸惑うようにイザナギがもらす。

言いたいことはわかる。

一也優騎という人間は、ヴィーを 正確には氷崎憂木を島に置いたままに生きられない。

一也は一人だけがのうのと生きていくことをよしとしない人間なのだ。

わかっているからこそ、願うのだ。

「しゃきつとしな！お前ら男だろう、今はやることがあるだろう！」

ミスラの叱咤に思わず苦笑する。

流石に女は強い。

神であっても人であっても、女という生き物は限りなく強くなる。

「ああ……そうだったな」

+++++

「……うん。少しだけ、借りる」

呟いて、札を撫でる。

表面は少しざらついていて、神々の心を憑かせてあるのがわかった。

同時に眉をひそめてしまう。

この札で島へ渡れば、優騎は間違いなく欠落する。

それが脊髄か、脳髄か、骨か、神経か、声帯なのかはわからないが、

欠落は免れないだろう。

それでもいいのかと、問う。

息を呑み、優騎の顔が青ざめる。

もちろん魂のことだから、身体に変化が現れることはないけど。

数秒の後、優騎は頷いた。

何がここまで優騎を追い詰めているのか、正直言って少し怖い。

人間はときに、思いもよらないことを起こすから、楽しいのだけど、だからこそ、その感情が起こす狂気が怖い。

優騎も僅かに狂気じみた行動を起こそうとしているのだ。

ああ、怖い。

怖くて怖くて仕方がないのに、楽しくてしょうがない。

未知なる生き物に遭遇した時のようなぞつとする感覚もあるのに、それを押し退けるようにして好奇心が首をもたげてくるのだ。

「行こうか、優騎」

札に書かれた言葉を一部変えて、呟く。

前はあちらから呼び寄せていたから、何もしなくて良かった。

今回はこちらから行くのだから、鍵を自分で開けなければならないのだ。

まばゆい光に、目を閉じた。

二十四話 事故満足と痛み

光がおさまったのを目蓋の裏で感じて、俺は優騎に身体を明け渡した。

みんなに話をするのは、優騎が先だ。

目を開けると、先程まで俺がいた、あの教会だった。

そして、目の前には氷か水晶かに封じられた人の姿。

頭に血が上った。

水晶のそばにはタナトスさんやイザナギさんがいるのに、何も、その人を助けようとするしない。

どうして、みんな、ふざけてる。

「どうして！その人、閉じ込めるのさ！？」

「一也優騎、君には関係ないことだよ」

女の人　多分ミスラさん　が、冷たく俺を見下ろす。

確かに、そうかもしれない。

俺には解りえない、深刻で仕方のない理由があるのかもしれない。

でも、何もしないなんて、許せないんだ。

「一也君、どうして帰ってきたの？」

「……氷崎がまだ、ここにいるでしょう。それに……フリーエントが俺の中にいて、まだやりたいことがある。だから……」

だから叶えてほしくて、ただの事故満足だけど、ここに帰ってきた。

イザナギさんは困ったように笑って、水晶を仰ぎ見た。

「ねえ……無理だと、解っているんだろっ？」

フリーエントに話し掛けたのか、俺に話すよりも少し厳しい口調。

それに答えるためか否か、フリーエントが意識を塗り替えていった。

+++++

一也君の雰囲気が変わった。

根本は同じだけれど、今の感情が違うから、雰囲気が違う。

私はもう一度問いた。

「解っているんだろう、無理だよ」

フレーエントはふっと笑う。

自分を嘲るような笑い方で、私はあまり好きではない。

「解ってたよ。でも、もしもと思って。……お願い、俺とヴィーを、同化させて」

酷く真剣な表情と声色で言って、フルーは頭を下げた。

同化は二つを一つとする、片一方の意識を残し、もう片一方の心を溶けさせること。

名実ともに一心同体になるのだ。

「……ヴィーゲントは、悲しむよ。一也君も、傷つくことになる」

「解ってる。優騎に本当のことを言わなきゃならないし、ヴィーに背くことになる。……でも、それはみんな同じだよな？」

言い返すことは、できなかった。

私達はヴィーに背き、記憶を消したのだから。

「……………いいかい？タナトス、ミスラ」

言ってもいいのか。

同化させてもいいのか。

問えば、頷きが返される。

フルーの決意というか、意志は強くて、頷く他ないのだ。

少し、フルーが笑った。

+++++

一也にした説明は多々ある。

それは記憶を消したことについてであったし、ヴィーゲントと氷崎憂木の関係性についてであったし、ヴィーゲントの望みについてであった。

聞くほどに表情は硬く、辛く、悲しげになっていったが、それでも一也は聞くことを放棄しなかった。

それについては誉めて然るべきだろう。

「……本当に、いいか？」

「いいですよ、決めましたから。やってください」

決意しか映さない声と瞳だった。

まるで恐怖を感じていないような瞳をしている。

今からする、一也からフレーエントを無理矢理に剥がす行為は、相
当の痛みと不快感を伴うはずだと教えられたというのに、だ。

何故、そう思う。

ただの人間はおじ気付くだろうに、何故一也はこんなにも真摯に揺

らがないのか。

「……行くぞ」

「はいっ……っっ、ッ！はっ、くっ……は、はあっ、っっ！ッ、くっ、ひいっ……！」

口元を手で押さえているにもかかわらず、聞こえてくる痛みを堪える声。

生理的な涙が零れ落ちていく。

一刻も早くその痛みを終わらせるため、フレイエントを引き剥がしている手に力を込めた。

今俺の手と腕は一也の体内、正確に言うなら魂に突っ込まれている。痛いのは当然だった。

「ああっ……！ッ、ふ、くっ、っっ、はあっ、ひ……く、はっ……あ、あ……っ！」

「声は、押さえない方が……いいのだが、な……っ」

フレージントを掴み、ぐつと手前に腕を引っ張る。

衝撃で前に倒れてきた一也を抱き止め、まだ引っ張る。

だが、正直言っただけ熱い。

一也の身体が熱を持ち、触れている部分から熱が伝わってくるのだ。

「もう、少しい……！」

「うあ……！」

引き抜くと、一也から力が抜けた。

すっかり力が抜けてしまったようで、そんな人間は正直重い！

しかし一也を放り出すわけにもいかず、重いままだ。

「……優しい、ね。でもそれ故に……」

後方で、イザナギが呟いていた。

二十五話 父と怒り

一也から引き剥がしたフレイエントの核を、ヴィーゲントの身体へ、水晶を抜けて入り込ませた。

「……タナトス、さん……それでフレイエントは、同化する、の……？」

痛みに顔をしかめながら、一也は水晶を見上げている。

「すぐには、無理だ。……この水晶は、入れることは簡単だが、容易には、出てこれられない。だから、フレイエントが肉体に惹かれ、ヴィーゲントの身体に入り……ヴィーゲントがフレイエントを内包すれば、同化する」

どれほどの時間を必要とするのかはわからないが、同化しないことはありえない。

そっか、と呟き、一也は目を閉じた。

安堵し、痛みを遮断するため、眠ろうとしているようだった。

微睡んでいるのか、一也の目蓋が小刻みに奮え、雰囲気は穏やかになっていく。

「タナトス、さん……俺ねえ……恐怖、感じなく……なった、よ」

ふわふわした意識の中で一也が言ったのは、対価だった。

+++++

日常が、戻ってきた。

俺は島へ行った代償として、恐怖を感じなくなり、そしてそれは、危険が大きくなるということだった。

人間は恐怖を感じることで危険を知り、気を付けるといふ行為をする。

恐怖を感じないということは、危険がわからないということ、危ないのだ。

本能的な恐怖もなくなってしまったために、その行動にどれほどの危険を伴うのかもわからなくなるから、俺は人が恐怖を感じるだろ
うことを、避けるようになった。

何しろ恐怖を感じないのだから、どんなことになるのか、タナトス
さん達もわからないらしく、避けるに越したことはないのだ。

そしてあの日から、氷崎憂木が世界からいなくなった。

氷崎がヴィーゲントになったから、それに合わせて世界が存在を消したそうだ。

悲しくもあり、これでよかったのだとも思う。

結局は、よくわからない。

「ただいま」

小さく声を出して、玄関で靴を脱いだ。

歩けば床がきしきしと音を出すような古い家は、当然のように木造だった。

「ああ……、おかえり。優騎、少し来なさい。話しておかなければならないことがある」

いつもは笑ったように細い瞳を見開いて　でも糸目のままだ
父さんは俺を道場へ連れ出した。

道場で俺は、島との関係を知ることになった。

+++++

「ぜ、んぶ……全部知ってたのかよっ！最初から、最後までっ。俺
が島へ行くずっと前から、知ってたのかよっ」

父さんへ詰め寄り、襟首を掴んだ。

和服を着ているから、掴みやすかった。

俺は今怒っていて、知るかぎりかつてないくらいに怒っていて、泣
きそうだった。

「……ああ。すまないとは、思っているよ。だがね、人では手出し
のできないことだった」

「知らないよ、知りたくなかったっ！そんな、そんなっ……見殺し
に、したなんて」

父さんは島の存在を知っていた。

代々の神主は、その存在を知らされるようだ。

父さんは世界の言葉を聞き、氷崎がヴィーゲントで、俺がフレーエントの魂を持って生まれてくることを知っていた。

世界はすべてを知っていて、その上で知らないふりをしていただけ。

許せなかった。

助けられたかもしれない、あんなことにならなかったかもしれないのに、見殺しにしたことを。

「すまない……ごめんな、優騎……許さなくて、いいから」

父さんは、悲しそうだった。

Epilogue

あの島を忘れられるわけがない、そう思っていた。

なのに、時とともに記憶は薄れていった。

俺と島のつながりを断ち切るように。

まだ俺は、あの汚れた札を持っている。

大切にしまって、ふとしたときに思い出して札を撫でてみて、悲しくなる。

もう十年が過ぎていて、ヴィーゲントは起きただろうか、同化できたのだろうか、そう考えている、十代の俺を夢に見た。

俺は今、神主をしている。

父さんから聞いたとおり、世界は島の存在を俺に教えた。

見殺しにした世界に憤らなかつたわけではないが、過ぎたことなのだ、納得させた。

ヴィーゲント、フレイエント、今君らは、幸せかい？

Epilogue b (後書き)

無理矢理終わったたる感が否めませんが、一応完結です。

読んでくださった皆様方、本当に、本当に有り難うございました！
意味のわからなくなる部分が多々あっただろうと思いますが、それ
にもかかわらず読んでくださり、感謝で言葉もでません。

重ねて、お礼申し上げます。

有り難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8420n/>

確かに彼処は異世界だった。

2011年8月26日23時15分発行